



行動分析手法を痴呆性高齢者ケアの実践に
援用するための研究

(研究課題番号 15592316)

平成15年度～平成17年度科学研究費補助金研究(基盤研究(C))

研究成果報告書

平成18年3月

研究代表者 今川 真治
(広島大学大学院教育学研究科助教授)



はしがき

比較発達学(およびかつては動物行動学)を専門とする筆者が、認知症高齢者の行動研究に携わるようになったのは、以前、大阪府立公衆衛生専門学校保健科で教鞭をとっておられた、津村智恵子先生(現大阪市立大学教授)と臼井キミカ先生(現長崎大学教授・前大阪府立大学教授)のご示唆に寄るところが大きい。その当時、先生方は、看護・介護の分野に行動研究の方法論を導入する必要性を強く感じておられ、しかしながらその必要性について理解を示す研究者、指導者がいかに少ないかを嘆いておられた。その後の長い準備期間を経たのち、臼井先生に協力する形で認知症高齢者の行動研究を始めてから、9年が経過しようとしている。その間、急速に進む高齢化のもと、増加する一方の高齢者に対する福祉の要請に応えるべく、介護保険法が制定・施行され、さらに今日までには何度かの改正も行われた。その過程において、制度そのものも大きな変革を遂げつつあり、痴呆症の呼び名そのものも認知症へと置き換えられた。このような時代背景の中で、認知症高齢者の幸福な生(Well-Being)に対する要求は高まるばかりである。筆者は、認知症高齢者の幸福に資するためには、高齢者の日常ありのままの姿を研究することに寄らなければならないと考え、筆者の専門である行動分析手法を、いかに認知症高齢者ケアの実践に援用するかの研究に取り組んできた。本報告書はその成果の一端である。

本報告書の第一章は、筆者が収集したデータに基づいて認知症高齢者の徘徊外出行動を分析し、これを当該対象者を始めとする徘徊高齢者の安全や見守りに、どのように生かせるかを考察したものである。また第二章は、現大阪府立大学教授の臼井みどり先生(前名古屋市立大学助教授)が、行動観察に基づく高齢者の非快適示唆行動を手がかりに、環境を操作するという援用方法を実践した報告である。この報告は、本研究における筆者の行動観察の手法を踏襲して別の施設において研究を行い、データの分析も筆者の指導の元に行ったものである。さらに論文執筆の過程にも筆者が深く関与し、用語の用法の統一などを図ったものであるため、本報告に採録した。第三章は、本研究の各段階における成果を発表した学会発表のポスター原図であり、研究の進行と展開を知るよい手がかりを与えている。

本報告が、高齢者看護・介護分野における行動分析手法の更なる援用に有益な示唆を与えることを願う。

目次

研究組織・研究経費	1
研究発表	2
第1章 グループホームにおける認知症高齢者の 徘徊・外出行動の分析	4
第2章 行動分析による痴呆性高齢者の 個別的な生活環境評価	24
第3章 学会発表 ポスター資料	
1 グループホームにおける痴呆性高齢者の行動分析 ー常同化した外出行動を示すMさんの場合ー	44
2 グループホームにおける痴呆性高齢者の行動分析 ー常同化した外出行動を示すMさんの場合ー	52
3 グループホームにおける痴呆性高齢者の徘徊行動の分析3 職員の対応と屋内徘徊行動との関係	61
4 グループホームにおける痴呆性高齢者の行動分析2 4年間にわたる1対象者の感情表出行動の分析	70

研究組織

研究代表者 今川 真治
(広島大学大学院教育学研究科助教授)

交付決定額(配分額)

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 15 年度	1,300,000	0	1,300,000
平成 16 年度	900,000	0	900,000
平成 17 年度	900,000	0	900,000
総 計	3,100,000	0	3,100,000

研究発表

(1) 学会誌・紀要等

白井みどり・白井キミカ・今川真治・荻野朋子・黒田研二 行動分析による痴呆性高齢者の個別的な生活環境評価. 2004, *Quality Nursing*, 10: 69-80.

今川真治 認知症高齢者の徘徊・外出行動の分析. 2005, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第54号, Pp. 363-371.

(2) 口頭発表

今川真治・小関みどり グループホームにおける痴呆性高齢者の徘徊行動の分析1 玄関出入りの記録から読み取れること. 第45回老年社会学会大会, 名古屋, 2003年6月.

今川真治 グループホームにおける痴呆性高齢者の徘徊行動の分析2. 日本心理学会第67回大会, 東京, 2003年9月.

今川真治 グループホームにおける痴呆性高齢者の行動分析 ー常同化した外出行動を示すMさんの場合ー. 日本発達心理学会第15回大会, 東京, 2004年3月.

今川真治 グループホームにおける痴呆性高齢者の徘徊行動の分析3 職員の対応と屋内徘徊行動との関係. 第46回老年社会学会大会, 仙台, 2004年7月.

今川真治 グループホームにおける痴呆性高齢者の行動分析2 4年間にわたる1対象者の感情表出行動の分析. 第47回老年社会学会大会, 東京, 2005年6月.

(3) 学会発表抄録等

今川真治・小関みどり グループホームにおける痴呆性高齢者の徘徊行動の分析1 玄関出入りの記録から読み取れること. 2003. 老年社会科学, 25: 161.

今川真治 グループホームにおける痴呆性高齢者の徘徊行動の分析 2. 2003. 日本心理学会第67回大会発表論文集, p. 1110.

今川真治 グループホームにおける痴呆性高齢者の行動分析 ー常同化した外出行動を示すMさんの場合ー. 2004. 日本発達心理学会第15回大会発表論文集, p. 417.

今川真治 グループホームにおける痴呆性高齢者の徘徊行動の分析 3 職員の対応と屋内徘徊行動との関係. 2004. 老年社会科学, 26: 257.

今川真治 グループホームにおける痴呆性高齢者の行動分析 2 4年間にわたる1対象者の感情表出行動の分析. 2005. 老年社会科学, 27: 217.

第1章

グループホームにおける認知症高齢者の徘徊・外出行動の分析

今川真治

1. はじめに

認知症高齢者に見られるさまざまな行動障害のうち、徘徊行動(あるいは外出癖)は、高齢者を介護する家族や介護施設のスタッフにとって、もっとも対処の難しい問題の一つであり、時には失踪や事故などによって高齢者自身に大きな危険を負わせる問題でもある(Roberts, 1999; Lai & Arthur, 2004)。しかし、徘徊の原因やその現れ方には、高齢者が個別にかかえている問題や、居住環境、あるいは利用施設の諸事情などによって違いが見られ、それぞれに個別的に対応する必要が求められている。そのような背景から、従来、徘徊行動そのものの定量的な分析はほとんど行われてきていない(Lai & Arthur, 2004)。しかし、認知症高齢者に対する適切な対処や介護のためには、徘徊行動の機序や徘徊のパターン、その経過などの情報をより詳細に把握する必要があると考えられる。

本研究では、グループホームに入居する一人の認知症高齢者を対象とし、この対象者がホームの玄関を出入りしたデータから、徘徊行動パターンの定量的な解析を試みた。さらに、ビデオを用いた行動観察と分析の手法を用いて、ホーム屋内と屋外におけるこの対象者の他者との社会的相互交渉と感情表出行動を分析し、徘徊行動の契機や要因に関する考察を試みた。

2. 研究方法

2-1 研究の概要

本研究は、長崎県島原市にあるグループホーム「ふるさとの家城下(代表：小関みどり)」において、平成13年度に行われた「民家型グループホームにおけるエンパワーメントケア事業」、および平成14年度より継続的に行われている「行動研究の手法を痴呆性高齢者の介護実践に援用するための研究」プロジェクトの一部として行われ

た。これらの研究は、認知症の進行を遅延させたり、場合によっては改善したりする効果大きいといわれる(小宮山, 1999; 塚本, 2003), 認知症高齢者に対するグループホームケアの実態や利点を, 入居する認知症高齢者を対象とした行動観察と分析の手法を用いることによって明らかにしようとするものである。

2-2 研究対象者

本研究の対象者は, ホームに入居している79歳の女性の認知症高齢者1名(以下Mさん)であり, NMスケールによる認知症程度評価は軽度認知症, N-ADL得点は47点で, 日常生活はほぼ自立しており, 要介護度はⅢであった。

Mさんは, 当グループホームに入居して約1年を経過し, 入居当初の数カ月間頻繁に現れていた危険性の高い屋外徘徊(施設を出て行き, どこをどう歩いたかわからず長時間の放浪のあと保護されたり, 捜索が必要となるといった類の徘徊)はほとんど見られなくなっており, 入居後数カ月間行われていたホーム職員による1対1による常時の付き添いや, 外出したときの連れ戻りなどの対処が必要とされなくなっていた。しかし, 玄関を頻繁に出て行くという行動パターンだけは消失せずに継続しており, 徘徊的な要素を極めて強く含んだ外出行動と見なされていた。そのため, いつまた不測の事態が起こるかわからず, ホーム職員はMさんの居場所に少なからず注意を留めておかなければならなかった。本論ではMさんのこのような行動を徘徊・外出行動と呼び, 本文中では外出行動と簡略化して呼称するが, これは徘徊と明確に区別できるものではない。

なお, 本研究において行っているビデオ撮影に関しては, ホーム職員と入居者の家族に対する説明を十分に行い, 入居者の家族から研究協力に関する承諾書を得て行っており, 倫理的な問題はない。

2-3 研究期間とデータ収集の方法

Mさんの外出パターンに関するデータ収集は, 平成14年10月13日から19日までの7日間にわたって行われた。この期間中, ホームの玄関に常時時計と記録紙を設置しておき, Mさんが玄関を出た時刻と, 屋外から玄関に戻った時刻を, ホーム職員が協力して連絡を取り合いながら記録紙上にすべて記録した。また, 買い物や他者の送迎などでの外出はその旨記載し, さらにその他の場合でも, 可能な場合は外出の理由を記録した。職員相互の連携により, Mさんの玄関出入りに関して, ほぼ正確な時刻の記録が可能であった。

上記外出パターン分析のデータ収集期間を挟んだその前後の時期である, 平成14年9月後半の3日間と10月後半の3日間に, Mさんの屋内外における他者との社会的

相互交渉と感情表出行動を分析するためのデータ収集を行った。データの収集に当たっては、各日の午前7時30分から午後7時30までの12時間を2時間ごとの6つのブロックに区分し、各ブロックについて10分間ずつ、ビデオを用いてMさんを撮影した。ビデオ撮影は筆者が単独で、Mさんから5メートル以上の距離を置きながら、Mさんの行動に可能な限り影響を与えないよう配慮しながら行った。なお、この時期はプロジェクトの開始から1年以上を経過しており、それまでのホーム職員や入居者との関係づけの結果、筆者のビデオ撮影は特別な影響を与えなくなっていた。

2-4 データ分析の方法

外出行動の分析データについては、本研究の手続き上、記録紙に残されたのは玄関出入りの時刻に関するデータのみであり、起床や就寝時刻の他、食事の時間なども記載されていない。そのため、Mさんにとって、自発的な外出が生活時間全体に対して占める割合などを計算する場合には、次の時間帯を除外して分析した。

- ①起床から初回外出までの時間
- ②食事の時間帯を挟んだ、食事前最後の帰宅時刻から食後最初の外出時刻までの時間
- ③最終帰宅時刻から就寝までの時間
- ④ホームの行事等での外出で、自発的でない外出時間
- ⑤記録ミスによる外出時刻不明の外出、および帰宅時刻不明の外出の前後の時間

ビデオで撮影された行動の分析には、10秒を単位とした点観察法とワン・ゼロ法(Altmann, J., 1974)を用い、Mさんの滞在場所と他者との近接状態(2 m以内・1 m以内・身体接触)を10秒ごとに記録するとともに、他者への接近行動や他者からの被接近行動、発話や会話などの言葉による相互交渉、感情表出行動などが単位時間の10秒内に観察されれば1を、観察されなければ0を与えてカウントするという方法で数量化を行った。

3. 結果と考察

3-1 外出行動のパターン分析

外出パターンを分析した7日間に、Mさんがホームの玄関を出たのは232回であり、このうち211回(90.9%)が徘徊とみなせる外出であった。前述のように、この時期におけるMさんの外出行動は、重度認知症高齢者に一般的に見られるような、無目的に見える、いわゆる徘徊行動(Snyder et al., 1978; Dawson & Reid, 1987)というわ

けではなく、「ちょっと畑を見てくる」、「神社までお参りに行ってくる」というような外出理由を付け加えたものもあり、外出時にMさんがそれらの理由をホーム職員に告知して出かけるようなことも少なくなかった。しかし、外出時の行動の分析からは、外出理由としたような特定の目的が達成されたという事象はほとんど認められなかった。

3-1-1 外出時刻の一般的傾向と外出回数・時間

図1に、観察された記録日ごとの初回外出時刻と最終帰宅時刻を示す。ただし、本研究の手続き上、記録紙上には起床時刻と就寝時刻が記録されていないため、起床後どの程度の時間をおいて外出が始まり、最終帰宅からどの程度の時間を経て就寝したかは明確ではない。

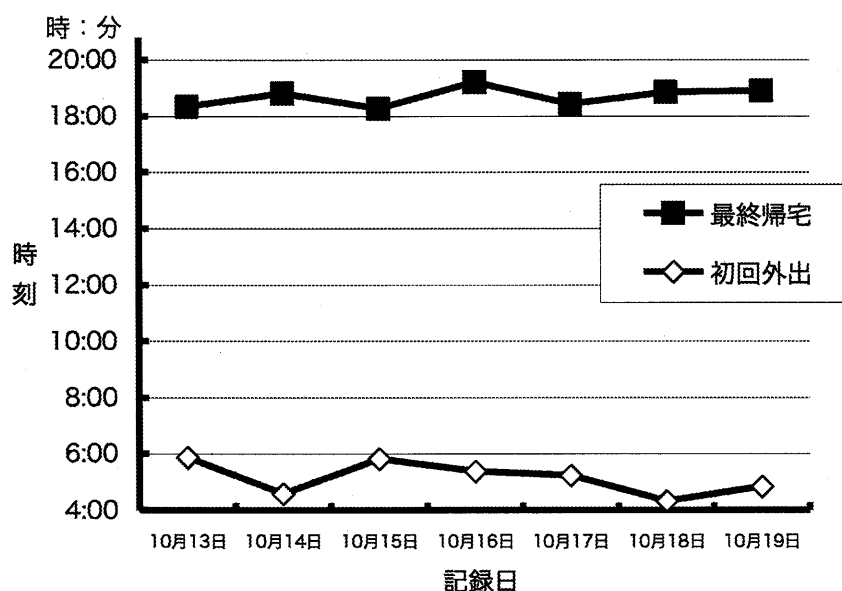


図1 初回外出時刻と最終帰宅時刻

Mさんは早い日には4時台、遅い日でも6時までには初回の外出が記録されていたが、ホームの日常生活記録と照合してみると、Mさんは通常5時前後に起床していることから、起床するとまもなく外出を開始する傾向があったといえる。また、本研究の時期には、通常20時までには就寝していたが、7日間で6日は18時台に最終の外出から帰宅しており、最終帰宅から就寝までには1時間前後の時間があったと考えられる。

図2は、すべての記録日の外出回数を時間帯ごとにまとめたものである。記録され

た外出時刻を1時間ごとにまとめて見ると、17時台には特に多く外出する傾向があったが、それ以外のほとんどの時間帯にも10回以上の外出が見られた。また、午前中に比べて午後の方が、外出回数が多い傾向があった。Mさんの外出には、ホームの車に同乗してのデイ・サービス利用者の送迎や買い物、その他、レクリエーションとしてのドライブなどが含まれたが、その回数は1日あたりせいぜい1回から5回程度であり、それ以外の外出はすべてMさんの自発的な外出行動であった。

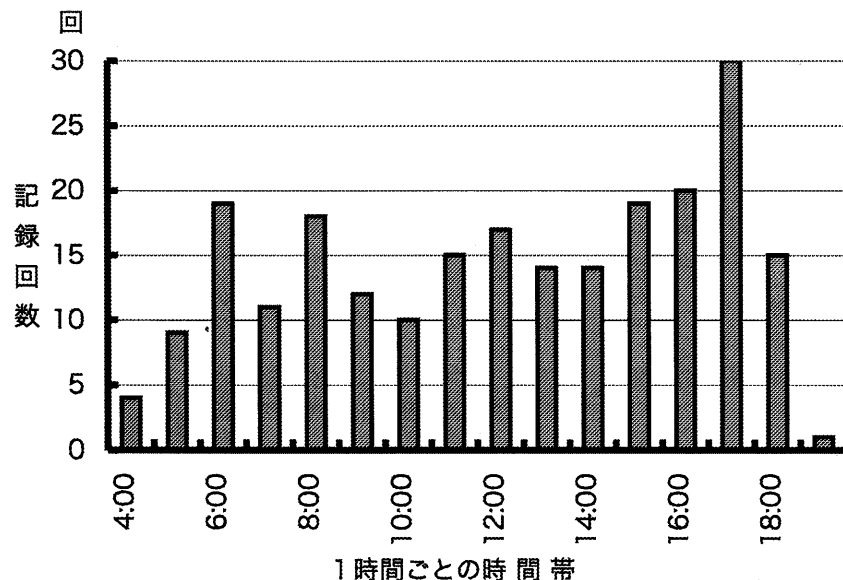


図2 時間ごとの外出回数

図3は、1回あたりの外出時間の分布を示したものである。1回あたりの外出時間の分布を見ると、5分未満の外出が最も多く、所要時間の長い外出ほどその出現数は少なかった。後述の行動観察時の記録と対照すると、5分未満の外出の多くはホームの庭内、あるいはホームの玄関から30m程度離れた一般道路まで出てすぐに戻るというものであり、休息や特定の場所での滞留のないものがほとんどであった。これに対し、15分以上の外出では、坂道になっている一般道路を上り下りすることが多く、通常2～4回の腰をかけたの休息、または立ち止まったの滞留が認められた。記録されたすべての外出の所要時間の平均は9分56秒であった。

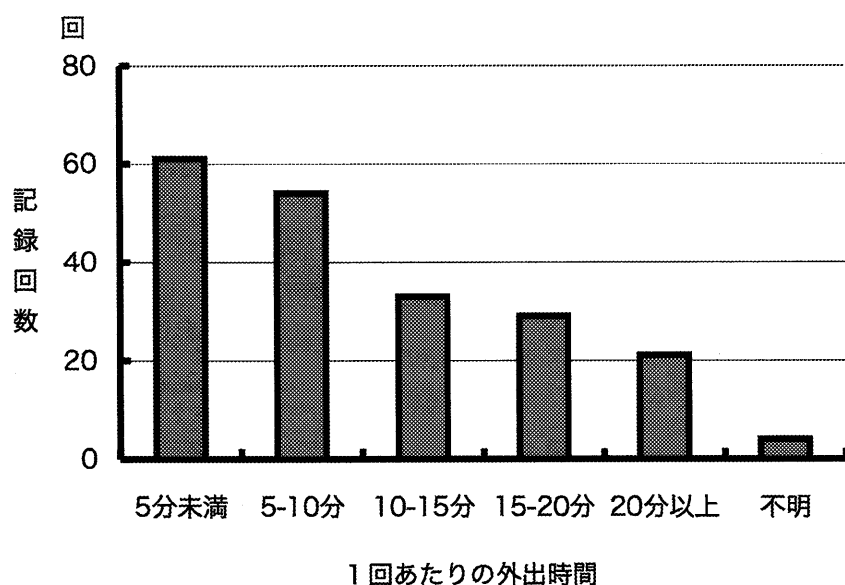


図3 外出時間ごとの記録回数

3-1-2 外出時間と非外出時間の割合

分析方法の部分で述べたように、Mさんの起床から就寝までの全ての時間から、記録手続き上の制限によって除外された時間帯以外の時間を「(自発的)外出可能時間」とし、この時間帯のうち、実際にMさんが外出していた時間と外出していなかった時間を、記録日ごとにまとめて表1に示す。

表1 外出可能時間と実際の外出時間

	外出可能時間	外出時間	非外出時間
10月13日	8:38	3:40	4:58
10月14日	11:03	5:38	5:25
10月15日	8:11	4:23	3:48
10月16日	10:38	4:39	5:59
10月17日	11:21	5:25	5:56
10月18日	11:38	5:18	6:20
10月19日	9:48	3:45	6:03
合計	71:17	32:48	38:29
平均	10:11	4:41	5:30

(時間：分)

記録を行った1週間における外出可能時間の平均は10時間11分であり、このうちMさんが外出していた時間は、平均4時間41分、ホーム内にとどまっていた非外出時間は5時間29分であった。この結果から、Mさんにとって自発的な外出は日常生活時間のうち約46%という大きな部分を占めている重要な行動であると言えるであろう。

3-1-3 生活時間帯区分と外出行動

外出行動が観察された時間帯を、ホームでの日常生活の流れに沿って「朝食前(その日の初回外出から朝食前最後の帰宅まで)」、「朝食後昼食まで(朝食後最初的外出から昼食前最後の帰宅まで：以下、午前中と表記)」、「昼食後夕食まで(昼食後最初的外出から夕食前最後の帰宅まで：以下、昼食後と表記)」の3つのブロックに分け、それぞれの時間帯の外出可能時間と実際的外出時間、およびホームでの滞留時間を図4に示す。なお、夕食後の時間帯は外出可能時間が短く、Mさんの外出回数も少なかったため分析から除外した。

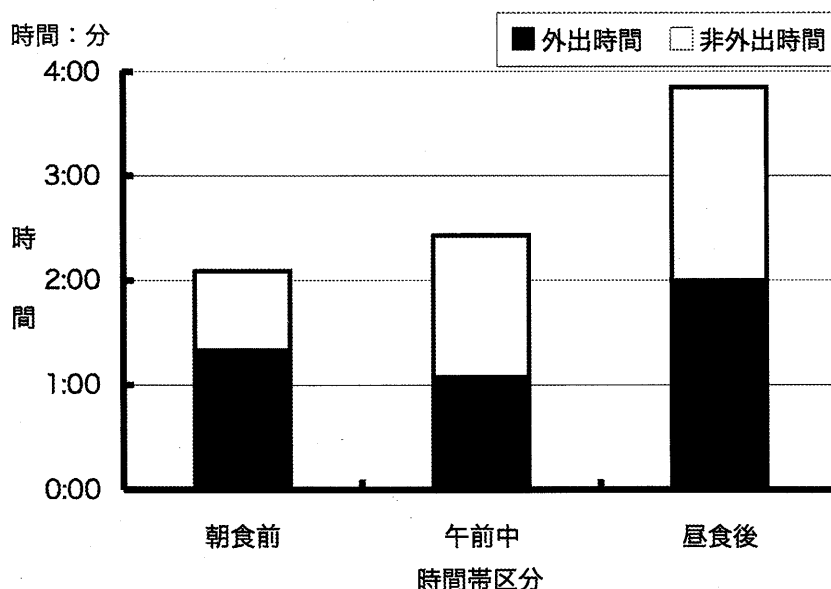


図4 外出時間ごとの記録回数

朝食前の時間帯は、もっとも外出可能時間が短く、その平均は2時間5分であり、このうちMさんが実際に外出していた時間は1時間20分であった。午前中の時間帯の外出可能時間は2時間26分、実際的外出時間は1時間5分であった。昼食後の時間帯はもっとも外出可能な時間が長く、3時間51分であり、このうちMさんが外出していた時

間は2時間であった。

朝食前の時間帯は、外出可能時間がもっとも短い時間帯であるが、この時間帯における外出可能時間に占める外出時間の割合は約64%に達し、Mさんはこの時間帯の多くを外出に費やしていた。これに対し、午前中と昼食後の時間帯の外出は、外出可能時間の約半分程度を占めるのみであった。

次に、上記の3つに区分した時間帯ごとに、実際的外出時間を5分ごとに区切った記録回数を図5に示す。

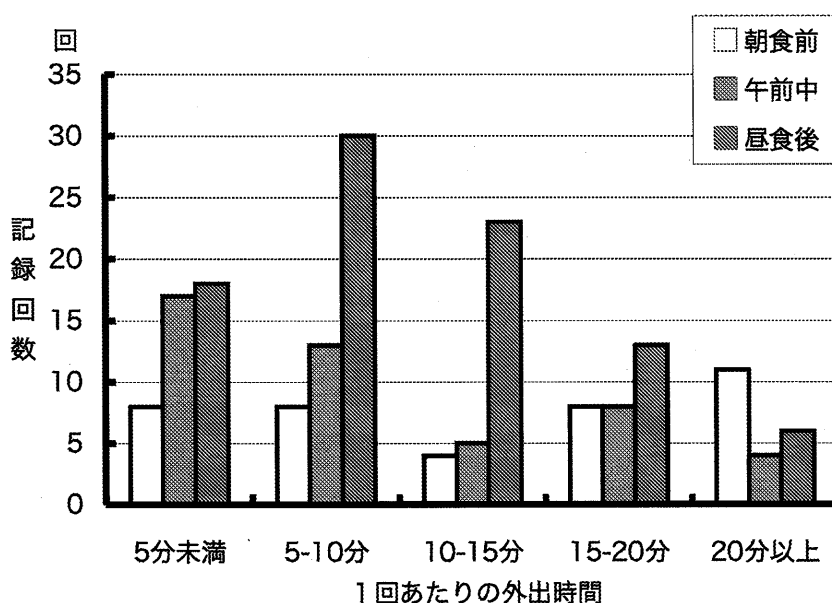


図5 時間帯区分ごとの外出時間

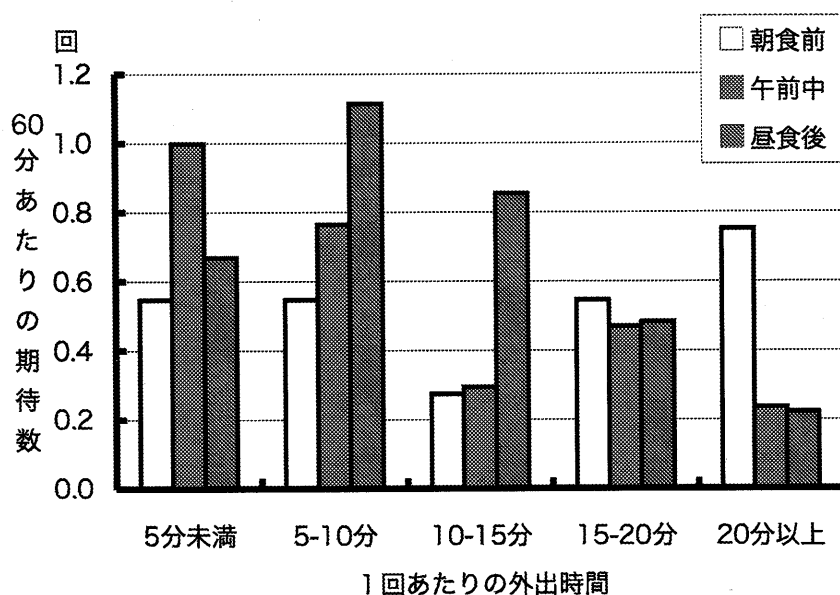
時間帯区分ごとに外出時間の分布を見ると、朝食前には10-15分の外出が少なく20分以上の外出が多かったが、全体としてはばらつきが小さかった。また、午前中は短い時間の外出ほど、より多く観察される傾向があった。他方、昼食後の時間帯には5分から15分程度の外出が多く観察された。

図5では各時間帯における外出可能時間の違いが考慮されておらず、時間帯ごとの直接的な比較ができない。そこで図6では、各々の区分時間帯に60分間の観察を行うと、それぞれの長さの外出がどの程度観察されると期待できるかを算出して示す。

この図から、5分未満の外出は午前中に多く、5-15分程度の外出が昼食後の時間帯に多いことが明らかとなった。さらに15分を超え、20分以上にわたるような長時間の外出は朝食前に特異的に多かった。この結果は、Mさんが時間帯によって外出の質を変えていることを示唆しているが、本研究のデータからは、その違いを明らかにす

ることはできなかった。

図6 60分あたりの外出時間の期待数



3-1-4 外出間隔

外出から戻り、玄関を入れてから次の外出のために玄関を出るまでの時間、すなわち外出間隔を分析した(図7)。

図7から、朝食前と昼食後の時間帯においては、短い外出の後でも長い外出の後でも、次の外出までの間隔はおよそ6分から12分に変動が小さかった。このことは、朝食前と昼食後の外出時間の長短の分布が大きく異なっていた(図5, 図6)ことと対照的であり、ホーム内での滞在時間が、外出の長短とは異なる何か別の要因に影響されていたことを伺わせた。これに対し午前中の時間帯においては、10分までの短い外出後の間隔は同様の傾向であったものの、10分から20分の外出のあとにはホームにいる時間が短く、20分以上の長い外出のあとには長い間隔を取るという傾向があった。以上のような、時間帯による外出間隔の相違も、外出の質の違いと関係しているかもしれず、更なる検証が必要である。

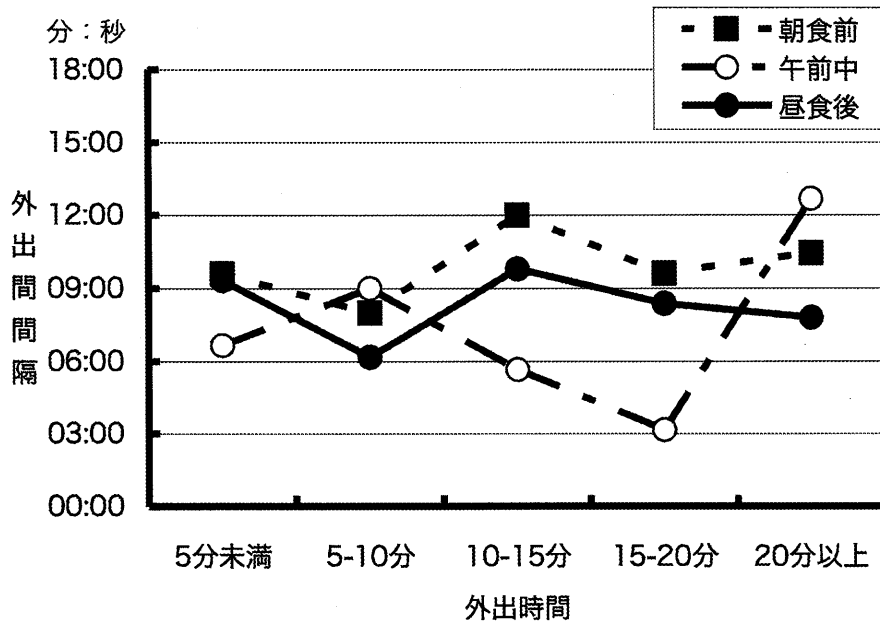


図7 外出時間と外出間隔

3-2 対人行動と感情表出行動の分析

3-2-1 滞在場所

研究を行ったグループホームの屋内外の略図を、図8に示す。当グループホームは築後約100年を経た古い民家をそのまま使用しており、ホーム入居者は日常の多くの時間を畳敷きの居間で過ごし、食事時にはダイニングテーブルの置かれた台所へ移動して食事する。本研究では建物内のこれ以外の場所を「その他」に分類したが、Mさんが実際に滞在したのは、そのほとんどが玄関と、玄関に隣接する廊下であったため、以下本文中では「玄関」と呼称する。

ホーム前には通常ホームの駐車スペースとしても使用されている庭があり、10m程度の道路Aを通过这个地区への取り付け道路Bとつながっている。道路Bの長さは約30mで、その先は、それほど通行量は多くないが勾配のある一般道路Cとなっている。Mさんが通常外出するのはこの道路Cまでであり、道路Bとの交差点から道路Cの坂道を下りきったところまでの長さは、約110mの距離であった。

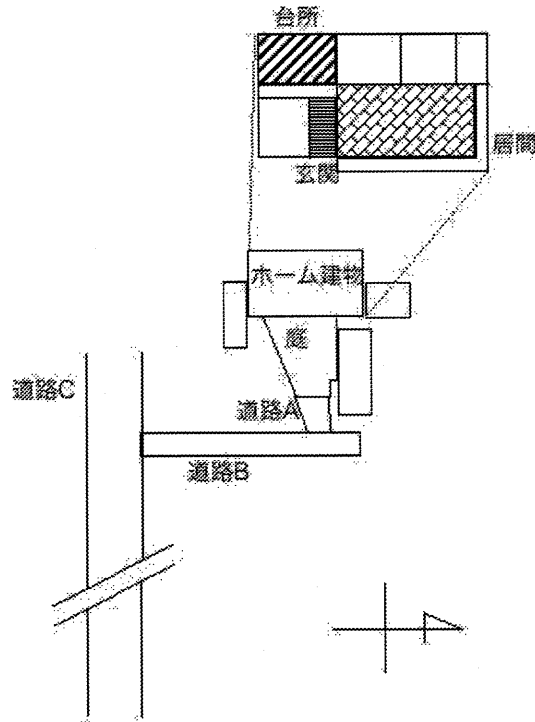


図8 グループホーム建物と周辺道路の略図

行動を分析した6日間において、Mさんが実際にどこにいたのかを図9に示す。Mさんの実際の滞在場所を詳細に見ると、屋内が60.9%、屋外が39.1%であった。場所別に見ると、最も長く滞在したのはホーム内の居間であり、次に多かったのは道路C、次が台所という順であった。また屋内のうち玄関は、全観察時間の6.8%を占めるのみであった。

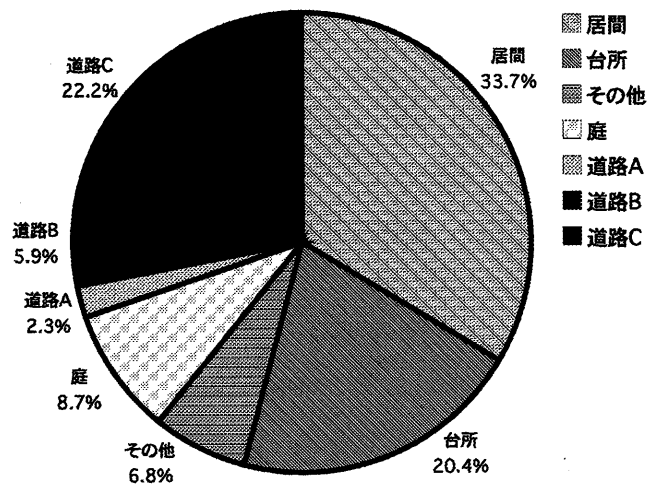


図9 Mさんの滞在場所

3-2-2 他者との近接と接近・被接近の生起率

図10に、それぞれの滞在場所ごとの近接者数を1分あたりの延べ人数として示す。屋内においては、屋外よりも多くの他者との近接が観察され、特に居間においては、1分間あたり、延べ8人程度の他者との近接が観察された。これに対し、屋外での近接者数はせいぜい1人程度に留まり、屋外においては他者との社会的交流が起こりにくいと推察された。さらに他者との身体接触行動は、そのほとんどが居間と玄関において観察された。居間や台所は入居者の通常の生活場所であり、居間におけるソファや座布団の配置状況、およびダイニングにおける着座位置の関係から、これらの場所において他者と近接したり、身体を接触させる他者が多いことは当然といえるが、玄関において身体接触を含む他者との近接が多いことは特筆に値する。

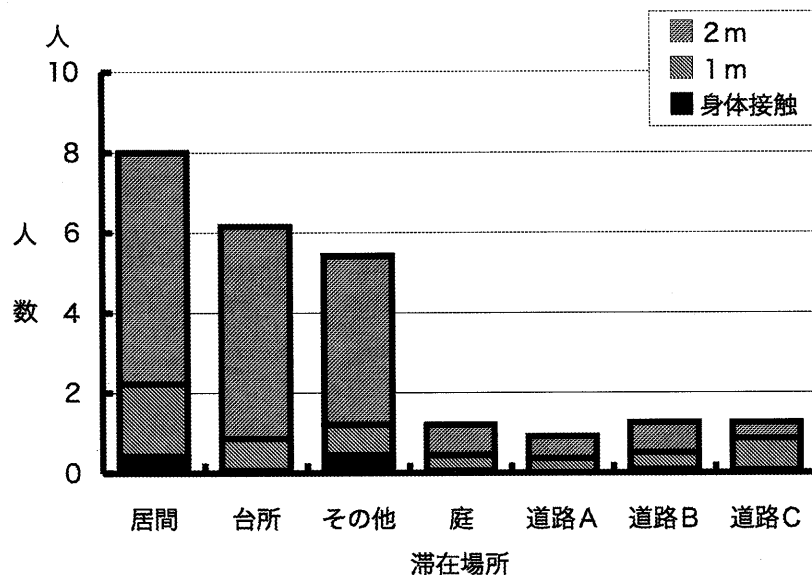


図10 滞在場所ごとの近接者数(1分あたりの延べ人数)

図11は、Mさんが他者の周囲1m以内に接近する行動と、他者がMさんの周囲1m以内に接近する事象の生起率を示している。他者への接近と他者からの接近が最も多く生じたのは台所であるが、これは、ダイニングのテーブルや椅子の配置によって、人の動線が制限されており、他者の横や後ろを通らなければ他所へ移動できないという物理的必然によるところが大きい。他方、居間における接近・被接近の生起率の高さは、ここでの生活時間が最も長かったことと関係していると考えられる。

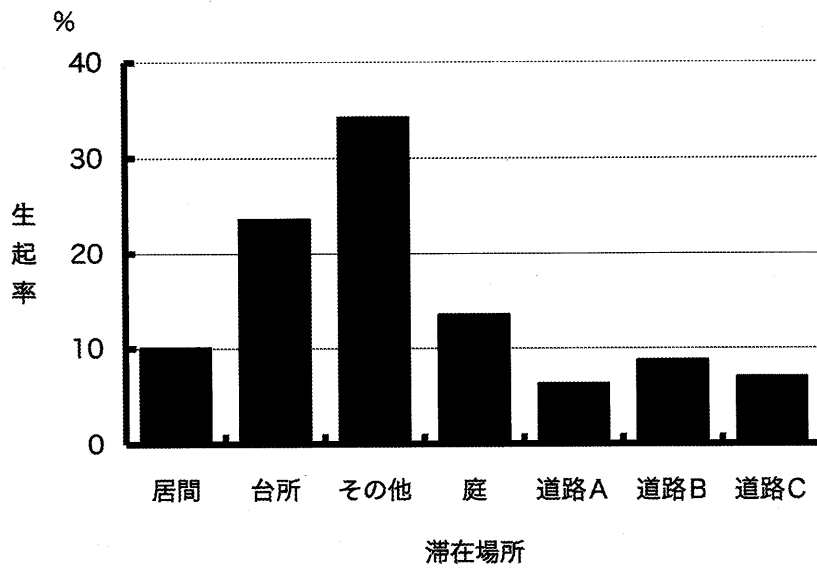


図11 他者への接近 + 非接近の生起率

そこで、Mさんが各滞在場所に滞在した時間を母数にして、その場所に滞在中の接近・被接近の生起率を算出したのが図12である。滞在時間を母数にした接近・被接近の生起率は玄関において最も高く、居間における生起率は高くなかった。このことは、玄関という場所が、それがなければ生起しにくい他者との社会的な相互交渉の基礎と

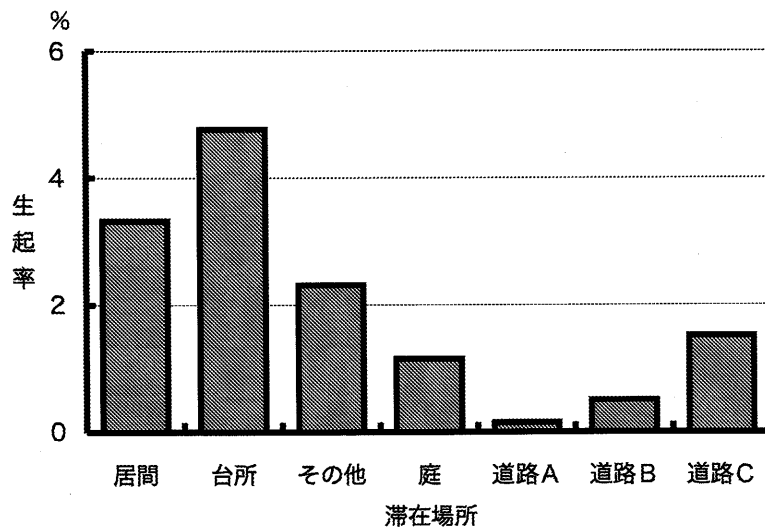


図12 滞在場所ごとの他者への接近 + 非接近の生起率

なる、人同士の近接状態を形成しやすい場所であることを示しており、ここでも玄関

という場所の持つ特殊性が指摘できるであろう。

3-2-3 言葉による相互交渉と感情表出行動

Mさんからホーム職員や他の入居者に向けられた発話・会話の生起率と、他者からMさんに向けられた発話・会話の生起率を図13に示す。Mさんと他者との間で最も多くの言葉による相互交渉が観察されたのは居間であり、次に多かったのは道路Cであった。道路Cが車通りの少ない一般道であり、道路C上における近接者数がそれほど多くなかったことを勘案すれば、ここでの他者との言葉を介した相互交渉の多さは特筆に値する。

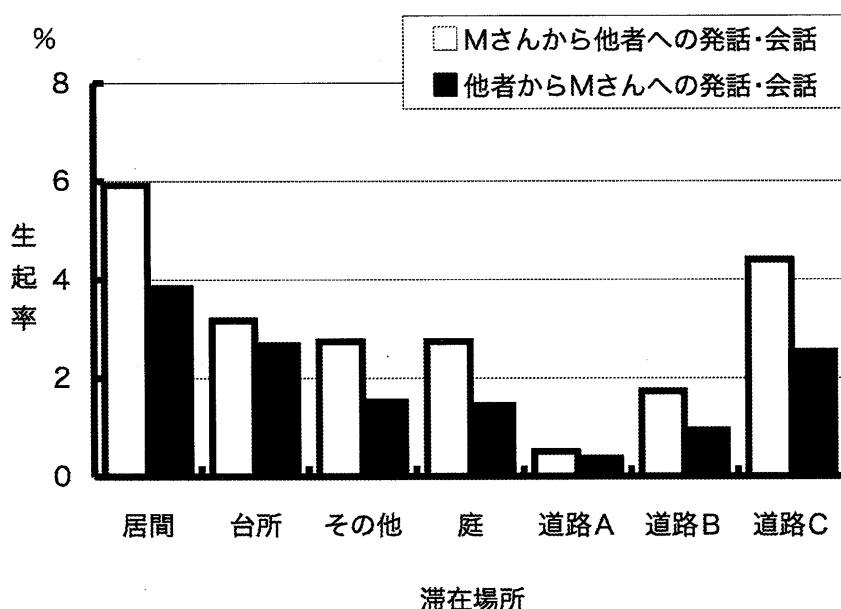


図13 言葉による相互交渉の生起率

Mさんの滞在時間を母数とした分析結果を図14に示す。Mさんの滞在場所のうち、滞在時間がそれほど大きくなかった玄関や庭、その他屋外の道路上において、Mさんから他者に向けられた発話・会話と、他者からMさんに向けられた発話・会話のいずれも生起率が高い傾向が認められた。むしろ滞在時間の割合が高かった居間と台所においてそれらの生起率が低く、Mさんにとって、居間や台所という場所は、相対的に言語による社会的交流が起こりにくい場所であることが伺えた。特に、滞在場所としての割合がそれほど高くなかった玄関において、Mさんと他者の間の言語による関わ

りかけが最も多く観察され、この結果によっても、Mさんにとって玄関が他者との社会的交流を持つ上で特異的な場所である可能性が示唆された。

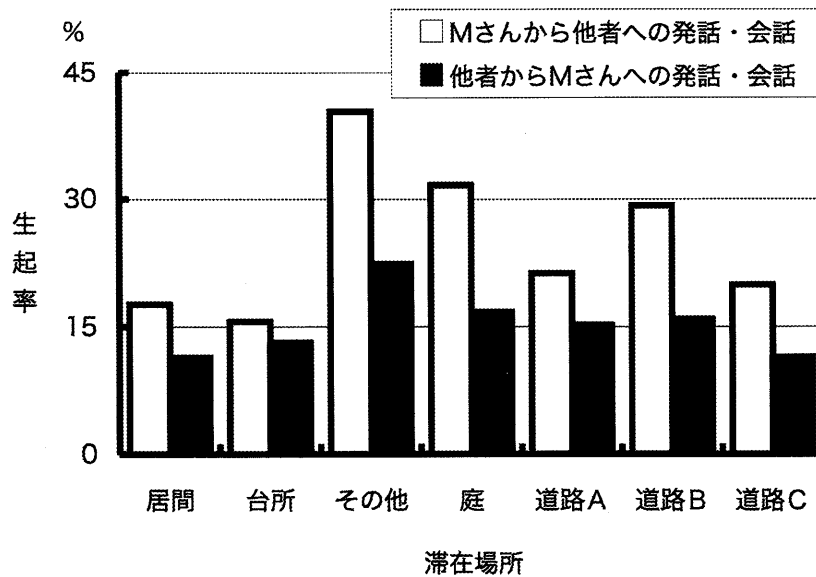


図14 滞在場所ごとの言葉による相互交渉の生起率

Mさんは日常的に機嫌の変化の少ない方で、笑顔や笑い以外の感情表出行動(例えば悲しみや怒り、驚き、羞恥など)はほとんど観察されなかった。そこで、Mさんの感情表出行動のうち、観察される割合の高かった(全観察時間の29.2%で生起)笑顔と笑いの生起率を、滞在場所ごとに示したのが図15である。

笑顔と笑いが最も多く出現したのは居間であり、観察された笑顔と笑いの43.2%が居間で観察された。居間では歌を歌ったり体操をするなどのレクリエーションが行われることが多く、通常はあまり社交的でないMさんも、このような場面でのホーム職員との交流の中で、笑顔を見せることがあった。次に笑顔・笑いの生起率が高かったのは道路Cであった。他者との近接や接近・被接近の頻度が低い道路Cにおいて観察されたMさんの笑顔や笑いは、その多くが自発的なものであり、通行する車や他者、目に映る景色などに対して自ら笑いかける行動が頻繁に観察された。

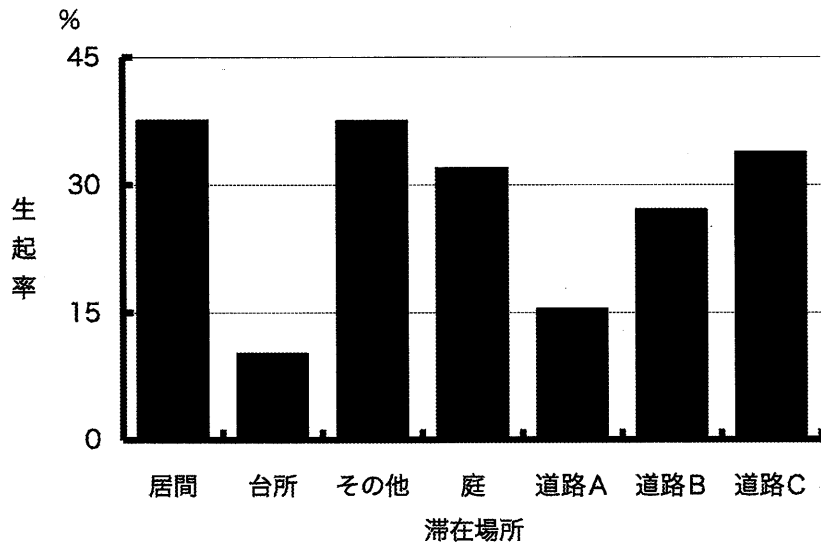


図15 笑顔・笑いの生起率

Mさんの滞在時間を母数とした分析結果を図16に示す。台所と道路Aを除き、それぞれの滞在場所に滞在中の約30%において、笑顔・笑いが観察された。特に玄関においては居間と同程度の割合で笑顔・笑いが生起しており、このデータからも、Mさんにとっての玄関は、他者との社会的交流が生起しやすく、他者への声かけや他者からの声かけとともに、何らかの肯定的な感情状態を作り出しやすい場所であったことが推察される。

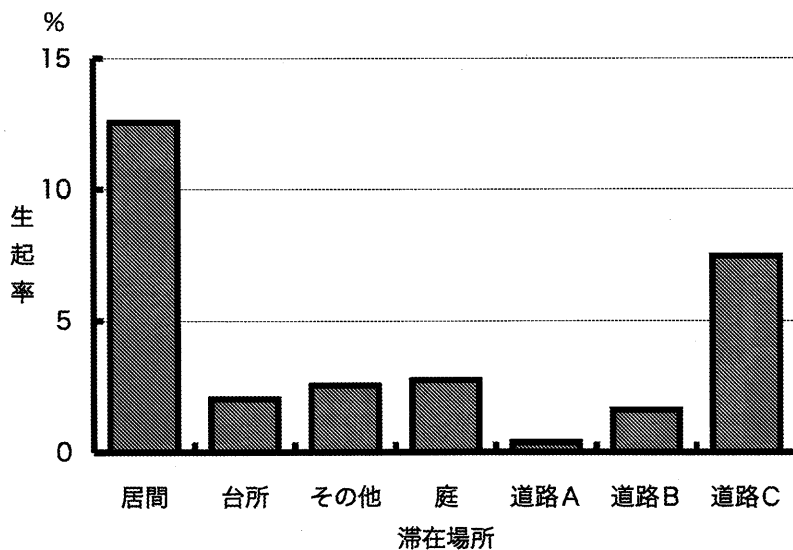


図16 滞在場所ごとの笑顔・笑いの生起率

4. 総合論議

本研究の対象者であるMさんは平成13年8月に当グループホームに入居し、入居当初は強い不安傾向を示すとともに頻繁な徘徊行動を示した。入居してから数週間の間、いつの間にか外出して失踪し、警察などに保護されるという事件を数回繰り返した。そのため、入居後数カ月の間、施設職員は常にMさんの動向に注意を払い、外出時には必ず誰かが同行する必要があった。しかし、本論のデータ収集期間である入居1年を経過したこの時期には、Mさんの外出傾向は常同化(stereotyped)しており、もはや「徘徊」というよりも「常同化した外出」行動と呼ぶべきものとなっていた。そのため、Mさんの外出は当人の自由にされ、職員の同行は必要とされていなかった。ただ、Mさんの姿が長い時間見えないことにホーム職員が気づくと、道路Cまで確認に行くということが必要であった。

起床後ほどなくホームの玄関を出て行き、最終の帰宅時刻から間もなく就寝してしまうという行動パターンから推察されるように、Mさん自身にとって外出行動はきわめて重要な意味を持っていたと考えられる。Mさんの外出行動は1日あたり30回前後、1時間あたりにしても2回以上と高頻度に観察される行動であり、Mさんにとって自発的な外出が可能であるすべての時間帯の約46%を占有していたことからそのことが伺われる。

Mさんは漁師だった夫を亡くしてから、しばらくの一人暮らしの後認知症を発症したが、まだ夜も明けぬうちから離床し、外出して近所を見回るといった行動パターンは、漁港まで夫を見送りに行き、その足で畑の作物の様子を見て回っていたという、長い間の生活習慣がそのままに残存しているのではないかと考えられた。早朝、朝食前の時間帯の外出が長時間にわたることも、その名残であると考えられるかもしれない。その意味からも、Mさんにとって外出行動は、切っても切れない生活の一部として機能しており、失踪の危険を最少にとどめる努力の上で、容認し見守ることが必要な行動であると思われる。

Mさんは日常生活時間の50%以上を居間と台所などの屋内で過ごしていたが、これらの場所においては近接者の数も多いため、他者との近接を基礎として、他者に対する発話や会話、笑顔や笑いが多く生起していた。しかしその一方で、滞在時間を母数とした分析においては、近接者数が少なく、他者への接近や被接近の生起率も低い屋外において、Mさんから他者に向けられた発話や会話が高い割合で観察され、さらに

笑顔や笑いも多く観察されたことも見逃してはならないであろう。

中でもとりわけ、屋内と屋外の接点と言うことができる玄関での滞在中に、他者への接近や他者からの接近が高い割合で観察された。さらに玄関では、他者との言葉による相互交渉が極めて高い割合で出現し、笑顔と笑いの生起率も高かったことを考え合わせると、Mさんにとって、玄関という場所の持つ特殊性が指摘できた。それは一つには、玄関という場所が、いわばボトルネックのような構造を持つために、人と人との接近や近接を促進し、さらにはそこに滞在する人が、外出と帰宅という志向的動作性を持つことなどが、人同士のコミュニケーション行動を増進するのかもしれない。そのような意味で、本研究で研究対象としたような民家型グループホームにおける玄関は、その位置や人々の活動動線とも関連して、入居者間の交流を促進する役割を持ちうると考えられる。近年、グループホームやユニット化された特別養護老人ホームなどの施設において、台所や玄関を入居者のコミュニケーションスペースとして見直そうという動きがあるが、これも、入居者同士のコミュニケーションを促進するような、これらの場所の機能に着目してのことかもしれない。

また、外出行動の運動的側面が、Mさんに何らかの肯定的な影響をもたらしていることも考えられ、そのことがMさんの外出行動が減少しない一因であるとも考えられる。笑顔や笑いが近接者数の少ない屋外において自発的に多く出現することは、Mさんが外出そのものを楽しんでいることの現れであり、他者との接近頻度が少ない道路上で、見知らぬ他者に対して離れた場所から声かけをするなど、Mさんの潜在的な社交性を垣間見せる場面も観察された。

本報告では、グループホームで生活するMさんという一人の認知症高齢者の、ホーム玄関出入りのデータを解析するとともに、Mさんの生活場所を中心とした他者との社会的相互作用や感情表出行動を分析することにより、一部の認知症高齢者が持つ徘徊行動や外出癖における行動の常同性や、その機序を明らかにしようと考えた。その結果、Mさんにとっての外出行動は過去の生活経験と結びついた、常同性の強い、また時間配分などから考えて、きわめてパターン化された行動であると考えられた。さらにその機序については、外出行動の運動的側面がMさんに身体的、精神的快を与えている可能性の他に、過去の生活経験や屋外の環境そのものに対する回帰がMさんに肯定的感情を惹起させている可能性も指摘できる。あるいは、潜在的な社交性から、Mさんが玄関など、他者との近接や言葉を介した相互交渉が起こりやすい場所での滞在を、積極的に選択している可能性も示唆された。

引用文献

- Altmann J. 1974 Observational study of behaviour: Sampling methods.
Behaviour, 49: 227-267.
- Dawson P. & Reid D. W. 1987 Behavioral dimensions of patients at risk of wandering. *Gerontologist*, 27: 104-107.
- 小宮英美 1999 痴呆性高齢者ケア 中公新書
- Lai C. K. Y. & Arthur D. G. 2004 Wandering behaviour in people with dementia.
Journal of Advanced Nursing, 44: 173-182.
- Roberts C. 1999 The management of wandering in older people with dementia.
Journal of Clinical Nursing, 8: 322-323.
- Snyder L. H., Rupperecht P., Pyrek J., Brekhus S. & Moss T. 1978 Wandering.
Gerontologist, 18: 272-280.
- 塚本茂 2003 グループホームケア 講談社

Abstract

The analysis of the wandering behavior of an elderly person with dementia in a nursing home.

Shinji Imakawa

Among the behavioral disturbances associated with dementia, wandering and wandering-related activities are perhaps the most difficult for family caregivers and care staff. However, because the causes and the patterns of wandering are not identical in all patients, and are rather influenced by the individual backgrounds, there is not much quantitative research of the wandering behavior itself. The purpose of this paper is to demonstrate, through a single case study of an elderly

person with dementia, quantitative patterns of wandering behavior so that these behavior analysis methods can be incorporated into nursing home care.

This research was conducted in a nursing home, Furusato-no-Ie "Joka", in Shimabara, Nagasaki Prefecture. The subject of this current study was one elderly woman, 79 years old, with mild dementia(35 point on the NM scale; 48 points on the N-ADL).For a one week research period, a blotter was set at the entrance of the nursing home and the exact time of the subject's entry and exit were recorded. Three one-day periods before and after the wandering research period, the behavior in daily life of the subject was video taped 6 times a day(10 minutes per time). The video data, processed point- and one-zero-sampling methods, showed interpersonal behaviors and facial expressions of the subject.

The subject comes and goes very frequently at the vestibule to the home from before dawn to dusk every day. A total of 232 outings were observed in the research period, of which 211 were free-will outings. The subject's outing period accounts for about 46% of potential time, so the outing was regarded as having become an inextricable part of life for the subject. Of all the parts and places in and out of the nursing home, the entrance seems to play the essential role in promoting the residents' and staffs' mutual interactions. The subject's communication behavior and positive emotional expressions such as laughter and smiling were notably observed around the entrance.

Key words: dementia, wandering behavior, nursing home

キーワード：認知症, 徘徊・外出行動, グループホーム

第3章

学会発表ポスター資料

- 1 グループホームにおける痴呆性高齢者の徘徊行動の分析 1
玄関出入りのデータから読み取れること 44
- 2 グループホームにおける痴呆性高齢者の行動分析
-常同化した外出行動を示す M さんの場合- 52
- 3 グループホームにおける痴呆性高齢者の徘徊行動の分析 3
職員の対応と屋内徘徊行動との関係 61
- 4 グループホームにおける痴呆性高齢者の行動分析 2
4 年間にわたる 1 対象者の感情表出行動の分析 70

グループホームにおける 痴呆性高齢者の 徘徊行動の分析 1

玄関出入りの記録から
読みとれること

今川真治¹⁾・小関みどり²⁾

1) 大阪大学大学院人間科学研究科

2) グループホーム ふるさとの家「城下」

日本老年社会科学会 第45回大会発表

背景

- 痴呆性高齢者の抱える随伴問題行動
 - 夜家族を起こす
 - 外出して迷う
 - 大声をあげる
 - 徘徊(外出癖)
 - …
 - ★ 「徘徊行動(外出癖)」は居住環境や利用施設の諸事情により現れ方に違いがあり、個別に対応する必要がある。
- 徘徊行動の定量的研究がほとんどない

目的

- 痴呆性高齢者に対する適切な対処や介護のためには、徘徊(外出)行動の機序や徘徊(外出)のパターン、その経過などの情報を、より詳細に把握する必要がある。
- ↓
- グループホームに入居する一人の痴呆性高齢者を対象とし、ホーム玄関出入りの記録から、徘徊(外出)行動の定量的な分析を試みる。

方法

- 対象者
 - Mさん(79歳女性)
 - 痴呆程度 : NMスケールで軽度痴呆
 - 生活自立度 : N-ADL47点でほぼ自立
 - 要介護度 : レベルⅢ(中等度要介護)
- 観察期間
 - 平成14年10月13日～19日
- 手続き
 - ホームの玄関に記録簿と時計を設置し、Mさんが玄関を出た時刻と、屋外から玄関に戻った時刻をできる限り正確にすべて記録する。

結果

- 外出の一般的傾向と外出回数に関する分析
- 外出してから帰宅するまでの時間に関する分析
 - 一般的傾向
 - 時間帯による分析
- 外出間隔(帰宅から外出まで)に関する分析

● **Fig. 1** 初回外出時刻と最終帰宅時刻に、大きな変動はない

● **Fig. 2** 自発的外出の回数は、天候や、買い物、ドライブなどの時間によって変動がある

● **Fig. 3** 早朝から夕方にかけて、外出の頻度は増加する

● **Fig. 4** 5分未満の外出が最も多く、時間の長い外出ほど頻度は小さい

● **Table 1** 自発的に外出することが可能な時間は平均

● **Fig. 5** 外出可能時間には日によって変動がある

● **Fig. 6** 外出可能時間に対する外出時間の割合は、比較的一定である

● **Fig. 7** 1日の時間帯を、朝食まで、午前中、夕食までの3つに区切ると、外出可能時間は大きく異なる

● **Fig. 8** 外出可能時間に対する外出時間の割合は、朝食までが最も大きい

● **Fig. 9** 昼食後は長めの外出の頻度が大きい

● **Fig. 11** 一旦帰宅してから次に出發するまでの時間は、朝食前と午後には約6分～12分程度でほぼ一定であった。

これに対し、午前中には、短い外出のあとはホーム内での滞留が長く、長い外出のあとはホーム内での滞留が短いという特徴的な変動がみられた。

午前中にはD. S. のお迎えドライブなどが入りやすいことも原因の1つと考えられるが、その原因の特定には、直接観察された行動の分析が不可欠である。

初回外出時刻と最終帰宅時刻

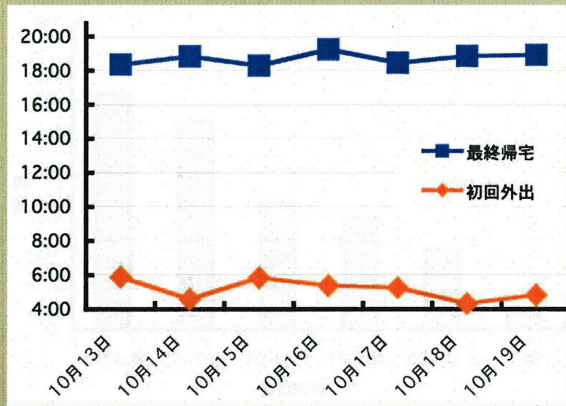


Fig. 1

観察日ごとの外出回数

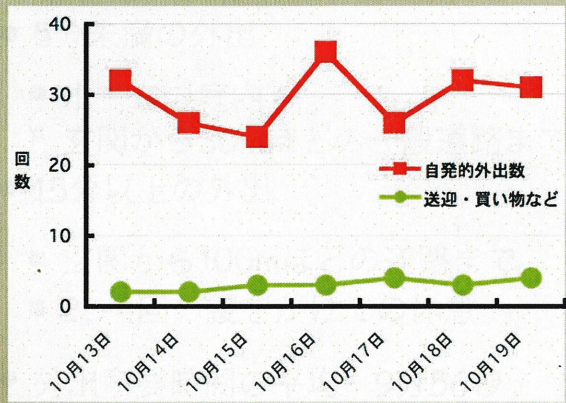


Fig. 2

時間帯ごとの外出回数

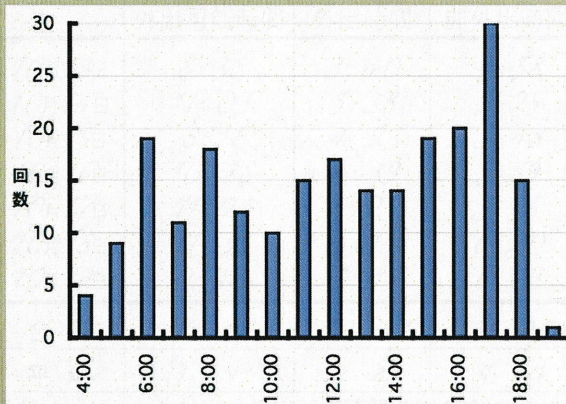


Fig. 3

1回あたりの外出時間の分布

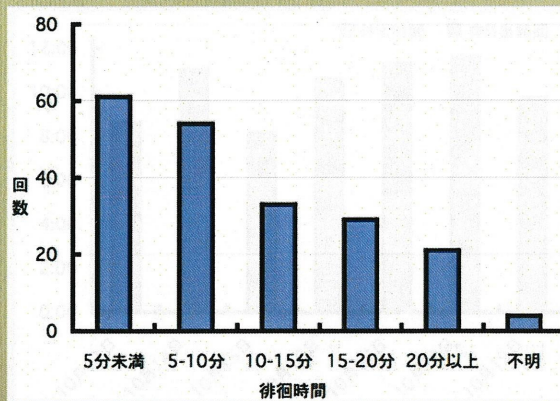


Fig. 4

外出中の行動について

- 5分未満の外出
 - ホームの庭内
 - 玄関から30mほどの一般道路まで
- 15分以上の外出
 - 玄関から100mほどの道路まで
 - 2~4回の腰をかけたの休息
- 外出所要時間の平均：9分56秒

外出可能時間と実際の外出時間

	外出可能時間	外出時間	非外出時間
10月13日	8:38	3:40	4:58
10月14日	11:03	5:38	5:25
10月15日	8:11	4:23	3:48
10月16日	10:38	4:39	5:59
10月17日	11:21	5:25	5:56
10月18日	11:38	5:18	6:20
10月19日	9:48	3:45	6:03
合計	71:17	32:48	38:29
平均	10:11	4:41	5:30

Table 1

外出は外出可能時間の約46%を占める

外出可能時間と自発的外出時間

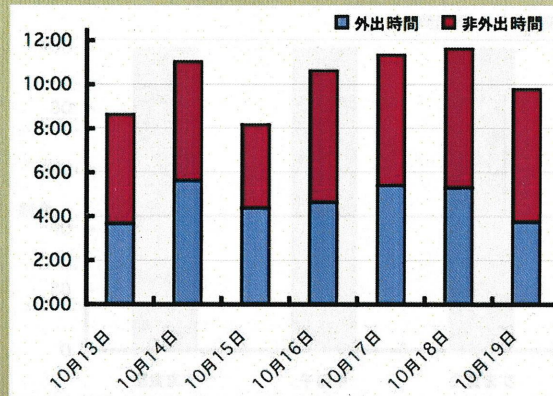


Fig. 5

自発的外出時間の割合

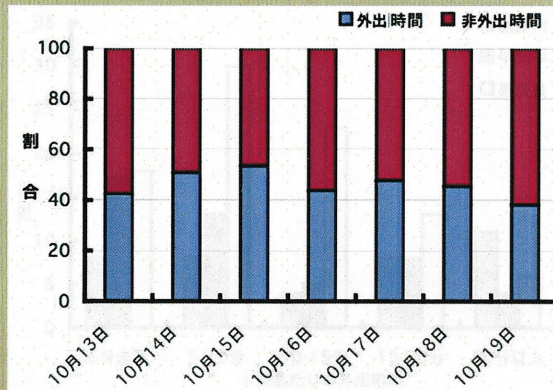


Fig. 6

外出可能時間と外出時間(時間帯別)

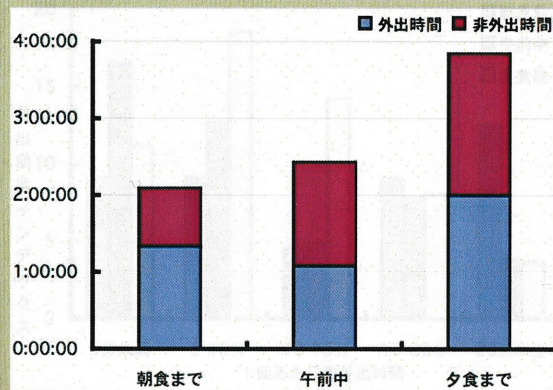


Fig. 7

自発的外出時間の割合(時間帯別)

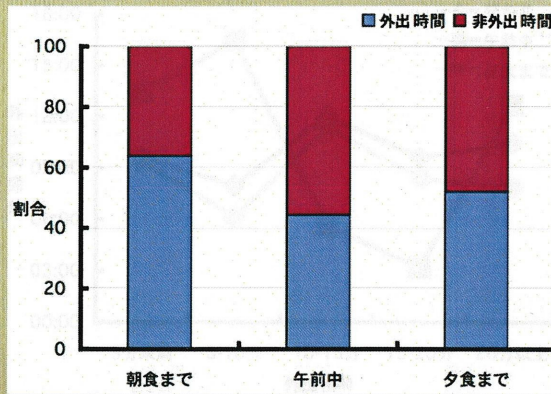


Fig. 8

時間帯ごとの外出時間分布

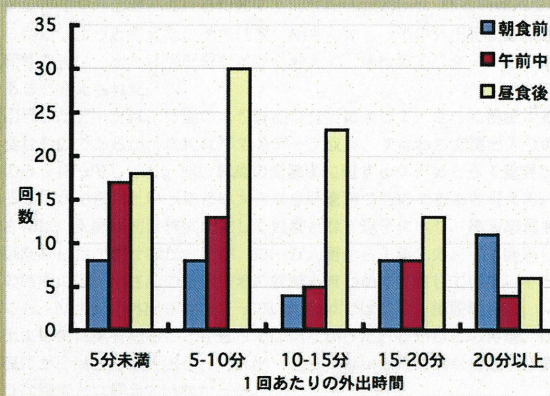


Fig. 9

外出時間と時間帯の関係

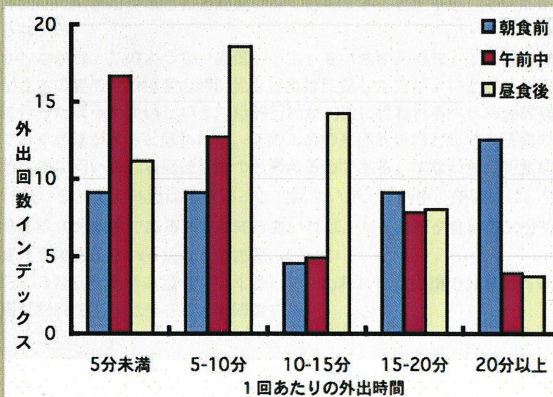


Fig. 10

外出間隔

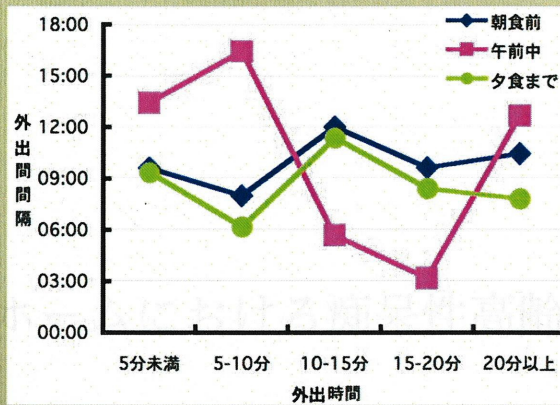


Fig. 11

本報告では、グループホームで生活するMさんという一人の痴呆性高齢者の、ホーム玄関出入りのデータを解析することにより、一部の痴呆性高齢者が持つ徘徊行動や外出癖における行動の常同性(Stereotypy)、あるいはパターン化を明らかにしようと考えた。その結果、Mさんにとっての外出行動は、きわめて常同性の強い、また時間配分などから考えて、きわめてパターン化された行動であると考えられた。

今回示したデータは、行動のより詳細な分析によって、さらに検証することが必要なものであるが、単純な形でのデータ収集、すなわち玄関出入りの時刻記録のみを持ってしても、施設職員の対象者に対するケアにとって重要な情報を得ることができたということは大きな意味を持つものであると考える。

Mさんは、入居当初は徘徊が激しく幾度となく迷子になり、施設職員もMさんの動向から目が離せなかったが、ホーム入居から1年2カ月ほど経過した本研究の時期には、Mさんの日常生活の状態もきわめて安定していた。そうは言っても、Mさんの外出癖は治まっていたわけではなく、施設職員は、Mさんの外出には常に気を配ることを怠ってはいなかった。しかしこの時期、ほとんどの職員が、Mさんの外出を、「外出=迷子」という危急的な対処を必要とするような事態とは捉えていなかった。

本データが示すとおり、Mさんの外出行動はそのほとんどが常同的であり、パターン化していることを施設職員も理解していたのであろう。Mさんが外出しようとしても、必要以上の抑制的声かけをしたり引き留めようとはせず、またMさんが外出してもすぐにその後を追ったり、連れ戻したりしなかったのは、外出したMさんがほとんど間違いなく帰宅することを予期していたからに他ならない。

しかしながら、このような「確信的予期」を「油断的過失」としないためには、Mさんの姿をどの程度の時間見なければ注意した方がよいとか、そろそろ探しに行ったほうがよいという対処的行動が的確に行われるべき時間的猶予を知っておく必要があると思われる。そのための基礎的資料として本研究の結果は十分有効に用いられる価値を持つと考えるのである。すなわち、朝食前であれば15分から20分の外出は珍しいことではないが、午前中、午後には、外出の平均時間は10分程度であることを知っていれば、たとえば夕食前の30分近い外出は要注意であるといったことである。

このような研究を積み重ねていくことで、われわれが介護の分野に貢献できる有用な材料を提示できることを確信する。

グループホームにおける痴呆性高齢者の行動分析

ー常同化した外出行動を示すMさんの場合ー

日本発達心理学会 第15回大会発表

目 的

- 痴呆性高齢者の感情表出行動や他者との社会的相互作用を、直接観察の手法を用いて詳細に分析した研究はほとんどない。しかし、痴呆性高齢者の個別的な行動パターンを分析し、その結果に基づいて、それぞれに応じたケアを提供することが、高齢者介護の現場で現在もっとも必要とされている。

本研究では、グループホームに入居する一人の痴呆性高齢者を対象とし、行動観察と分析の手法を用いて、対象者の感情表出行動や、他の入居者や施設職員との社会的相互作用に関する定量的な分析を試みた。

方 法

- 本研究は、長崎県島原市にあるグループホーム「ふるさとの家城下」において行われた。当グループホームの入居者数は9名、職員数は常勤が6名、非常勤が3名で、日勤は3名から4名、当直は1名で行われている。

本研究の観察対象者は、ホームに入居している79歳の女性の痴呆性高齢者1名(Mさん)であり、研究開始時のNMスケールによる評価は軽度痴呆、N-ADL得点は47点で、日常生活は自立しており、要介護度はⅢであった。

なお、ビデオ撮影に関してはホームと入居者の家族に対する説明を十分に行い、研究協力に関する承諾書を得て行っており、倫理的に問題はない。

ビデオを用いた行動観察の方法

①午前7時30分から午後7時30分までの12時間を2時間ごとの6セッションに区分

②対象者を1セッションあたり10分間連続観察 → 1日に1時間のデータを得る

③対象者を中心に半径約3メートルの範囲を撮影

●午前7時半から夕方7時半までの12時間を2時間ごとの6Sessionに区分

Session 1 07:30 - 09:30 朝食

Session 2 09:30 - 11:30

Session 3 11:30 - 13:30 昼食

Session 4 13:30 - 15:30

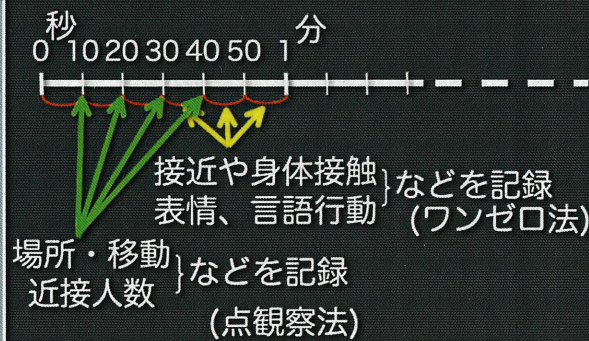
Session 5 15:30 - 17:30

Session 6 17:30 - 19:30 夕食

●平成14年 9月20日～22日
10月24日～27日

合計 231分を分析(10秒単位)

●10秒ごとの点観察法とワンゼロ法



結 果

- Mさんの外出時間は、外出可能時間の45%以上を占め、外出は重要な活動である。(第45回日本老年社会科学会にて発表)
- ① Sessionごとに屋内外で過ごす時間の割合は違っていた。
 - Session 1→朝食
 - Session 4→レクリエーション等
 - Session 6→夕食
 - Session 5→外出頻度高い
- ② 屋内にいる割合が高いSessionでは2m以内の近接人数が多い。
- ③ 自発的な挨拶行動や発話行動、会話の開始は、Session 2と5で多く見られ、他者から声をかけられることは、Session 2で多い。
- ④ 笑い・笑顔の表出はSession 2・4・5で多く見られた。
- ⑤ すべての時間の半分以上は居間と台所に滞在し、屋外の滞在の多くは道路C上での滞在であった。
- ⑥ 近接者数は屋内において多く、屋外では少ない。居間とその他(玄関)では他者との身体接触が観察された。
- ⑦ 他者への接近と他者からの接近が最も多く観察されるのは、玄関である。
- ⑧ 台所と道路A以外で、笑顔や笑いが多く観察される。
- ⑨ 自分からの声かけや挨拶は、玄関を含む屋外で、高い生起率で観察され、特に玄関で他者との会話が多い。

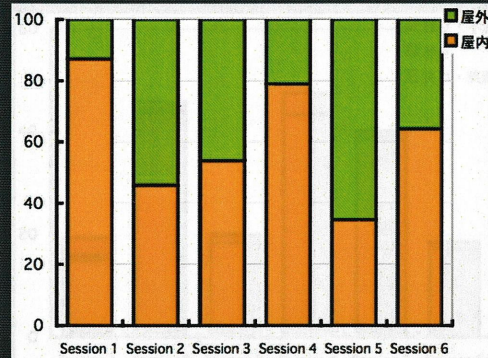
●外出可能時間と実際の外出時間

	外出可能時間	外出時間	非外出時間
10月13日	8:38	3:40	4:58
10月14日	11:03	5:38	5:25
10月15日	8:11	4:23	3:48
10月16日	10:38	4:39	5:59
10月17日	11:21	5:25	5:56
10月18日	11:38	5:18	6:20
10月19日	9:48	3:45	6:03
合計	71:17	32:48	38:29
平均	10:11	4:41	5:30

第45回老年社会科学会にて発表のデータより

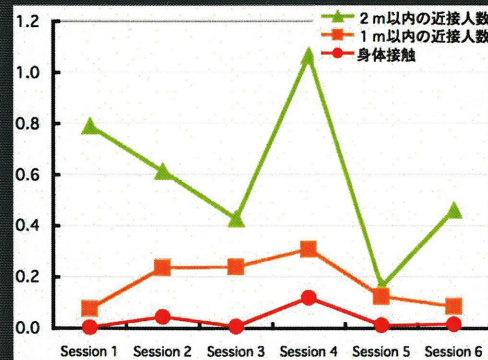
●セッションごとの 屋内外で過ごした割合

1



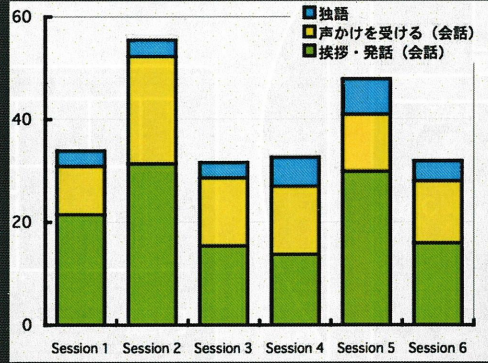
●セッションごとの 近接者数(1観察単位あたりの人数)

2



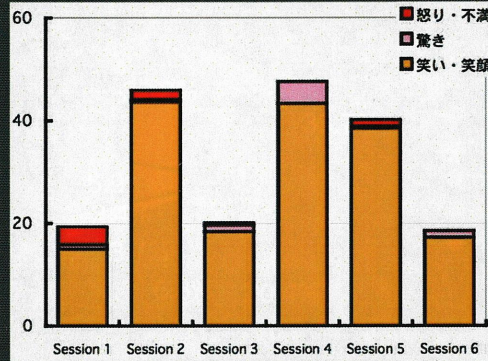
●セッションごとの
音声表出行動の生起率

3

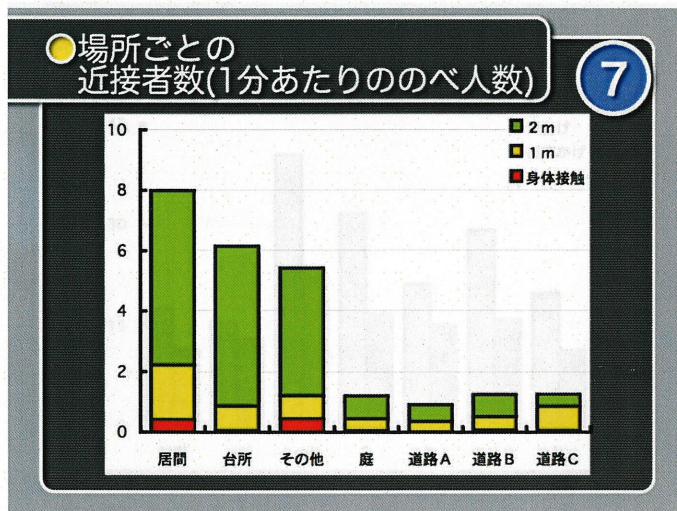
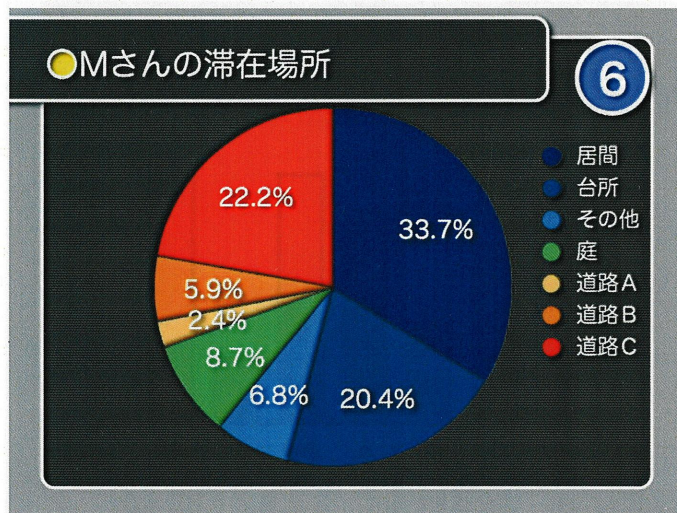
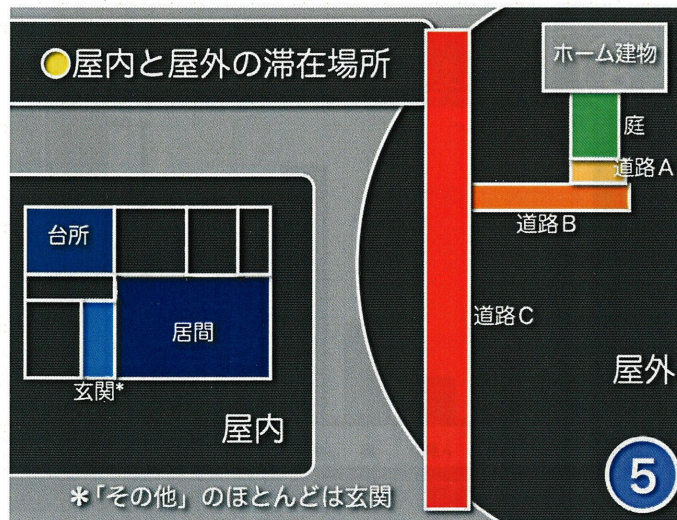


●セッションごとの
感情表出行動の生起率

4

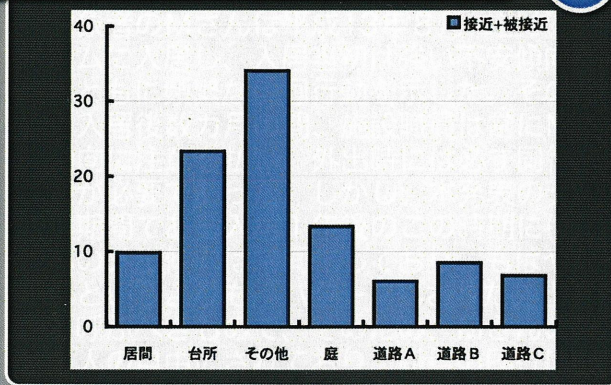


7



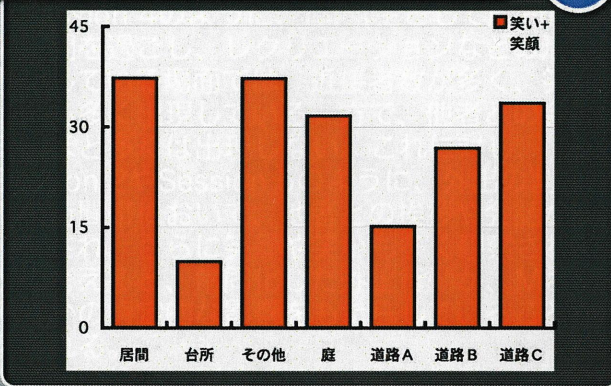
● 場所ごとの
他者への接近・非接近の生起率

8



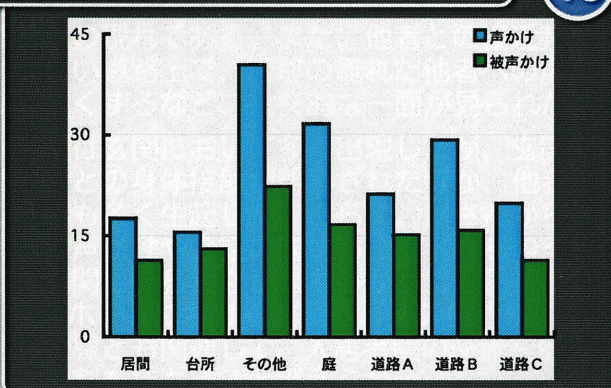
● 場所ごとの
笑い・笑顔の出現率

9



● 場所ごとの声かけ(会話)

10



まとめ

対象者のMさんは平成13年8月に当グループホームに入居し、入居当初は強い不安傾向を示すとともに頻繁な徘徊行動を示した。そのため、入居後数カ月の間、施設職員は常にMさんの動向に注意を払い、外出時には必ず同行することが必要であった。しかし、本発表のデータ収集期間である入居1年後のこの時期には、Mさんの外出傾向は常同化しており、もはや「徘徊」というよりも「パターン化された外出」行動と呼ぶべきもので、そのため、Mさんの外出は当人の自由にされており、職員の同行は必要

とされていなかった。

Session 4のように、屋内(主として居間)で多くの時間を過ごし、レクリエーションなどの活動に参加している場面では、近接者数が多く、笑顔や笑いも多く出現している一方で、他者との会話はそれほど多くは出現しない。これに対し、Session 2やSession 5のように、外出の割合が高い時間帯において、他者との挨拶や会話が多くの観察され、さらに笑顔や笑いも多く観察されることを考えると、常同化した外出行動が、Mさんに何らかの肯定的な影響をもたらしていることが考えられる。

笑顔や笑いが近接者数の少ない屋外において多

く出現することは、Mさんが外出を楽しんでいることの現れである。また、他者との接近頻度が少ない道路上で、距離の離れた他者への声かけを多くするなど、社交的な一面が見られた。

笑顔は玄関において多く出現したが、玄関では他者との身体接触が観察されたほか、他者との接近も多く生じた。さらに、Mさんから他者への声かけや会話の開始も、他者からのそれも、玄関にいるときが最も多かった。民家型グループホームにおける玄関は、その位置や人々の活動動線とも関連して、入居者間の交流を促進する役割を持ちうると考えられる。

グループホームにおける痴呆性高齢者の徘徊行動の分析 3

職員の対応と屋内徘徊行動との関係

日本老年社会科学会 第46回大会発表

目 的

○ 徘徊の頻繁な痴呆性高齢者への関わりかけ方については、定式化された情報が少なく、介護スタッフの個別な対応が必要とされることが多い。しかし、スタッフのどのような対応が対象者の心理的安定に寄与し、さらには徘徊の低減に繋がるかについては十分なデータがない。本研究は、ビデオを用いた行動解析の手法を用いて、屋内徘徊の機序や継続性に関与する要因を探ることを目的に行われた。

方 法

○ 本研究は、長崎県島原市にあるグループホーム「ふるさとの家城下」において行われた。当グループホームの入居者数は9名、職員数は常勤が6名、非常勤が2名で、日勤は3名から4名、当直は1名で行われている。

本研究の観察対象者は、ホームに入居している77歳の女性の痴呆性高齢者1名(Yさん)であり、NMスケールによる評価は重度痴呆、N-ADL得点は15点で、食事は部分介助、排泄は全介助であるが、屋内移動はほぼ自立しており、要介護度はVであった。

なお、ビデオ撮影に関してはホームと入居者の家族に対する説明を十分に行い、研究協力に関する承諾書を得て行っており、倫理的に問題はない。

ビデオを用いた行動観察の方法

①午前7時30分から午後7時30分までの12時間を2時間ごとの6セッションに区分

②対象者を1セッションあたり10分間連続観察→1日に1時間のデータを得る

③対象者を中心に半径約3メートルの範囲を撮影

●午前7時半から夕方7時半までの12時間を2時間ごとの6 Sessionに区分

Session 1 07:30 - 09:30 朝食

Session 2 09:30 - 11:30

Session 3 11:30 - 13:30 昼食

Session 4 13:30 - 15:30

Session 5 15:30 - 17:30

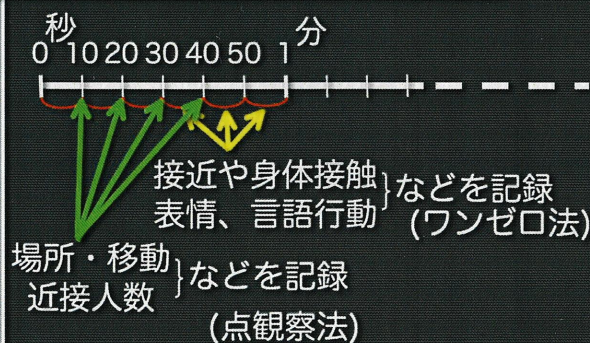
Session 6 17:30 - 19:30 夕食

●平成14年 7月18日～9月22日

居間にて休息中のデータのみ

合計 161分40秒を分析(10秒単位)

●10秒ごとの点観察法とワンゼロ法

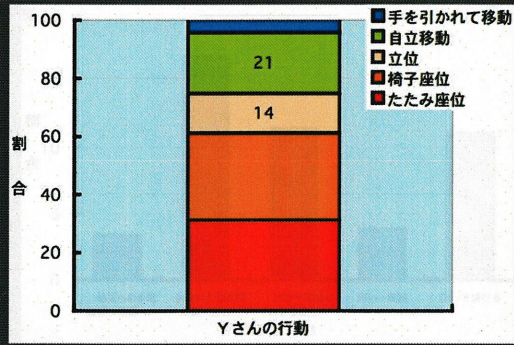


結 果

- 1 居間での休憩時間中、約21%が屋内徘徊の移動であり、約14%が徘徊中の立位であったことから、観察時間の約35%が徘徊に費やされていた。
- 2 Yさんは他者との空間的距離が短く、身体接触者数、1m以内の近接者数が多かった。(屋外徘徊中心・中等度痴呆のMさんとの比較参照)
- 3 他者への接近・被接近の割合に比して、他者からの被接触の割合が高い。
- 4 他者からの挨拶や発話を高い割合で受け、それらに対する反応の割合は高いが、自ら他者に挨拶や発話を向けることは極めて少なく、笑い・笑顔の生起率も低い。(他の感情表出行動は全く観察されなかった)
- 5 一旦着座(たたみ・椅子)してから、次に起立するまでの時間は、自由着座(自己の自由意志による)の場合、全体の93%が60秒以下であり、中でも20秒以下の割合が高く、60秒以下の着座継続時間の平均は18.6秒であった。これに対し、強制着座の場合、60秒以下の着座継続時間の平均は15.36秒であった。
- 6 起立してから、次に着座するまでの時間は、自由着座の場合、全体の78%が30秒以内であり、60秒以下の平均時間は15.4秒であった。強制着座の場合は、起立した直後10秒以内と、60秒以上との2峰性の分布が見られ、徘徊の抑止と関連していると思われた。
- 7 他者(ほとんどは職員)による手を引いての誘導や強制着座は、その理由が明確でないものが最も多かった。
- 8 自由着座後に比して、強制着座後には
- 9 不随意運動である、身体の動揺が有意に多く見られた。
- 10 自由着座の場合と比して、強制着座の場合、着座後20秒以内の体位変換(立ち上がろうとしたり、座り直そうとする)や、身体の大きな動き(居ずまいを正したり、前屈・後屈したりする)が、より高い頻度で観察された(86.2%)。

○Yさんの姿勢・移動行動分類

1



Yさん

Mさん

2

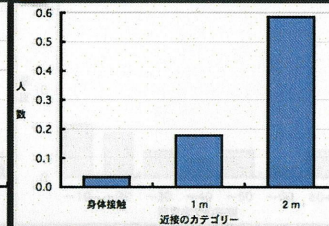
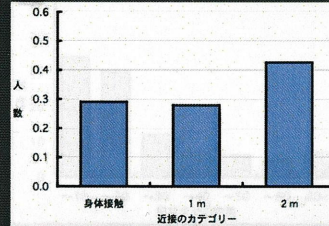
*既に発表済みデータより



重度痴呆・屋内徘徊のみ

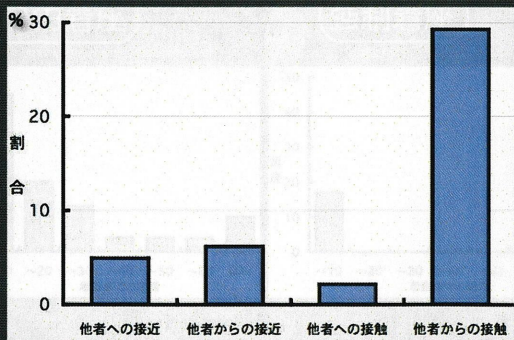


中等度痴呆・屋外徘徊多い



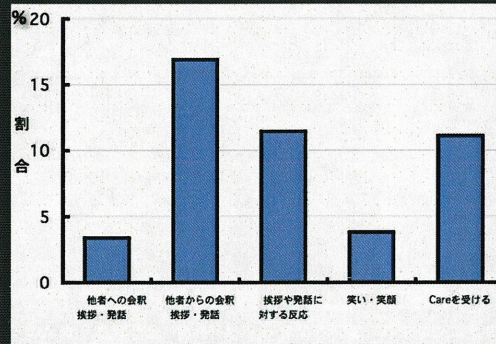
○他者への接近・被接近 接触・被接触の生起率

3



○他者との相互交渉と笑い・笑顔

4



○着座から起立までの時間分布

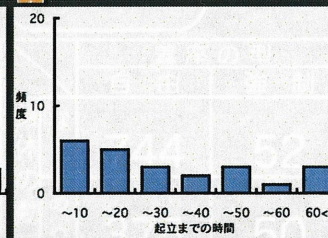
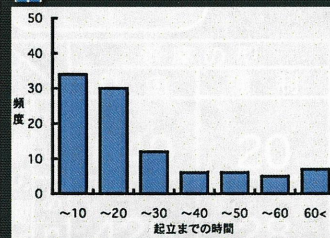
5



自由着座



強制着座



○起立から着座までの時間分布

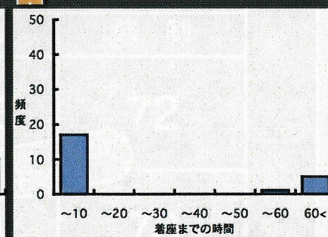
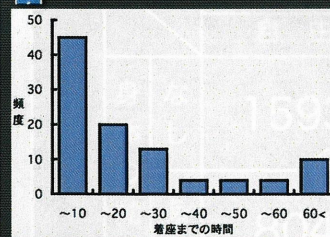
6



自由着座

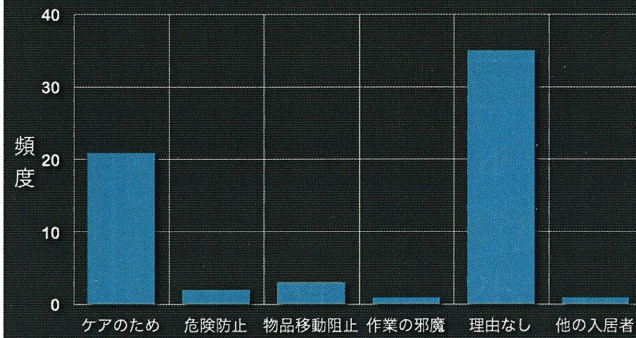


強制着座



7 他者による誘導・強制着座の理由

7



8 着座の型と身体の動揺の有無

8

たたみ着座と
身体の動揺

椅子着座と
身体の動揺

		着座の型				着座の型	
		自由	強制			自由	強制
身体の動揺	なし	849	20	身体の動揺	なし	744	52
	あり	429	28		あり	375	50

$\chi^2=12.56$
 $p<0.01$

$\chi^2=9.91$
 $p<0.01$

単位 (コマ)

9 着座合計と
身体の動揺

9

		着座の型	
		自由	強制
身体の動揺	なし	1593	72
	あり	804	78

$\chi^2=21.25$
 $p<0.01$

単位 (コマ)

着座の型と体位
変換・大きな動き



着座後20秒以内

10

		着座の型	
		自由	強制
体位変換・大きな動き	なし	35 64.6%	4 86.2%
	あり	64	25

単位
(回)

まとめ

Yさんの居間での休息時間の1/3が徘徊に費やされており、徘徊率は高いと言えたが、その一方で、他者との空間的距離が短く、他者からの声かけや挨拶、身体接触を頻繁に受けていた。これは、Yさんが室内を常に移動していることに伴って、職員や他の入居者がYさんに多くの注意を向けていることの証左でもある。さらには、職員をはじめ、他者のケア行動を多く惹起していることが伺えた。

Yさんは着座と起立を頻繁に繰り返し、着座している時間の平均は20秒以下と、極めて短かった。また、職員が強制的に着座させた23回のうち14回(63%)は、3秒以内の極めて短いものであり、徘徊の抑止と関連していた。

Yさんが手を引かれて誘導されたり、椅子やたたみに着座させられたりした63回の事例のうち、その56%が明確な理由を特定できないもので、これも徘徊の抑止を意図するものと思われた。

Yさんが自分の意志で着座した場合と、職員により着座させられた場合とを比較すると、強制的に着座させられたあとには、肩や首を竦めるような不随意運動(身体の

動揺)が有意に多く観察された。

また、強制着座後20秒以内の体位変換や、体の大きな動きも有意に多く観察され、強制された着座がYさんにとって必ずしも快適な状態でなかったことが伺われた。

Yさんには、笑顔以外の感情表出行動は認められなかったが、笑顔が出現したのは、スタッフ(あるいは他の入居者)が、Yさんの正面から、目を合わせながら声をかけたり手を握るなどの関わりを行った場合のみであった。

グループホームにおける痴呆性高齢者の行動分析 2
4年間にわたる 1 対象者の感情表出行動の分析

日本老年社会科学会 第47回大会発表

目 的

○認知症高齢者の加齢に伴う行動の変化や認知症の進行に伴う行動変容に関して、長期にわたる縦断的な分析はこれまでほとんど行われていない。特に、重度の認知症高齢者に関する情報は非常に乏しいと言える。もちろん、加齢変化と認知症の進行に伴う変化を明確に分離することは困難であり、また両者は独立に進む性質のものでもない。しかし、表出された行動の詳細な分析に基づけば、高齢者の行動のどの側面にどのような変化が認められるかを知ることが不可能ではない。本研究では、グループホームに入居する1人の重度認知症高齢者を4年間にわたって継続的に観察し、対象者の他者との社会的相互作用を中心とした行動を分析するとともに、感情表出行動に着目することによって、対象者の感情行動の変化を追跡することを目的とした。

方 法

○本研究は、長崎県島原市にあるグループホーム「ふるさとの家城下」において行われた。
本研究の観察対象者は、ホームに入居している2001年時に75歳の女性の認知症高齢者1名(Yさん)であり、NMスケールによる評価は重度認知症、N-ADL得点は15点で、食事は部分介助、排泄は全介助であるが、屋内移動はほぼ自立しており、要介護度はIVであった。
本研究は、平成13年から平成16年まで(対象者の75歳齢～78歳齢)の4年間にわたって行われた長期継続研究の一部であり、本報告は、各年の7月から9月までの3カ月間のデータを縦断的に分析したものである。

なお、ビデオ撮影に関してはホームと入居者の家族に対する説明を十分に行い、研究協力に関する承諾書を得ており、倫理的に問題はない。

ビデオを用いた行動観察の方法

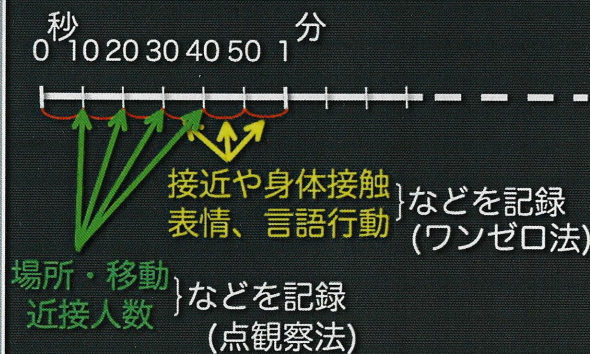
①午前7時30分から午後7時30分までの
12時間を2時間ごとの6セッションに
区分

Session 1	07:30 - 09:30	朝食
Session 2	09:30 - 11:30	
Session 3	11:30 - 13:30	昼食
Session 4	13:30 - 15:30	
Session 5	15:30 - 17:30	
Session 6	17:30 - 19:30	夕食

②対象者を1セッションあたり10分間連
続観察→1日に1時間のデータを得る

③対象者を中心に半径約3メートルの範
囲を撮影

●10秒ごとの点観察法とワンゼロ法

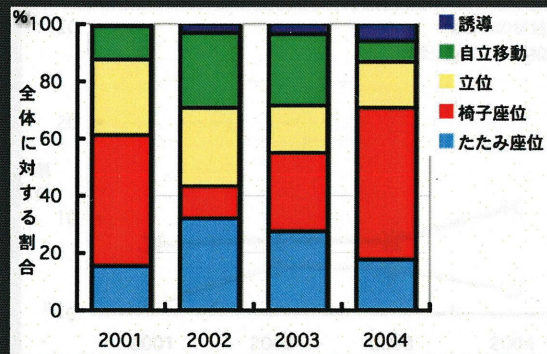


結 果

- 1 徘徊による立位と移動は、2001年には居間での休息时间全体の約38%であったが、2002年から2004年にかけて54%→41%→23%と減少した。この間、たたみ座位が減少する一方で、より安楽な椅子座位が増加した。
- 2 2002年を除き、Yさんが近接する他者の数には大きな変動はなく、他者との社会的相互交渉の環境に大きな変化はなかった。
- 3 Yさんから他者への接近は生起率が低く、近接は主として他者の接近によってコントロールされていた。
- 4 他者との身体接触は4年間を通じてほぼ同程度に観察された。
- 5 他者との社会的相互交渉は、他者からYさんに向けられたものの方が生起率が高く、Yさんから他者に向けられる関わりかけは2002年以降減少傾向であった。
- 6 他者が声をかけたり関わりかけたのに対してYさんが反応しない割合は、次第に増加する傾向にあった。
- 7 他者を見つめたり追試する行動は、多少変動はあるものの4年間を通じて15~25%程度の生起率で観察された。他者への挨拶行動である眉上げや笑顔も低率ながら4年間を通じて観察された。
- 8 ⑦のうち、他者への反応としてではなく、自発的に他者に向けられた定位や発話、挨拶行動などの肯定的表出行動も、低率ながら4年間を通じて観察され、消失しなかった。

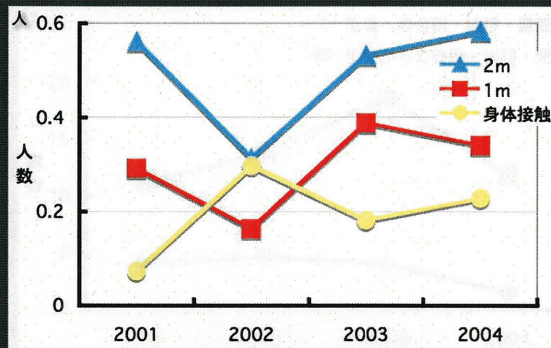
● 姿勢・移動行動分類

1



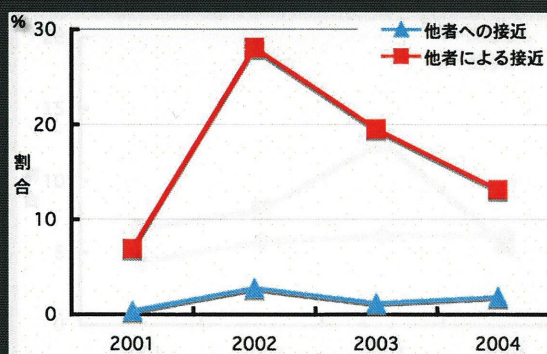
● 近接者数(1 観察単位あたりの人数)

2



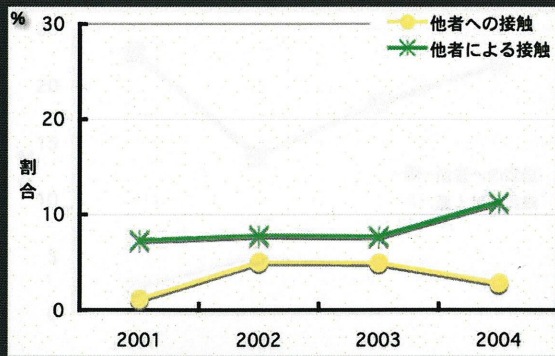
● 他者への接近・被接近の生起率

3



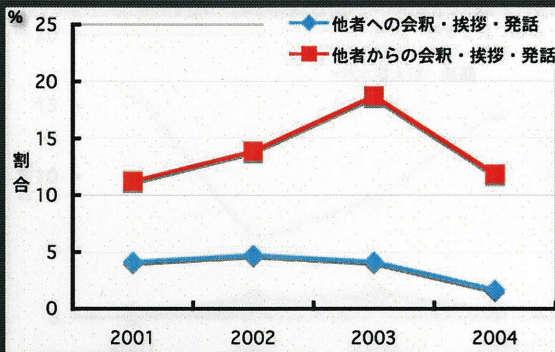
●他者との身体接触の生起率

4



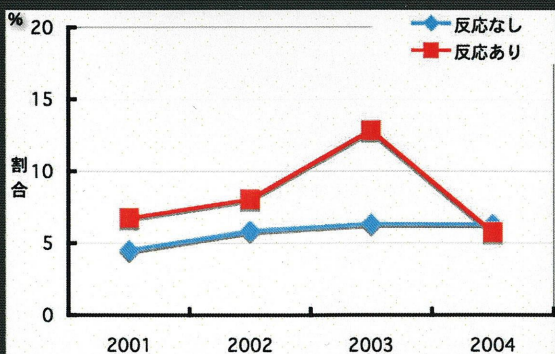
●他者との社会的相互交渉の生起率

5



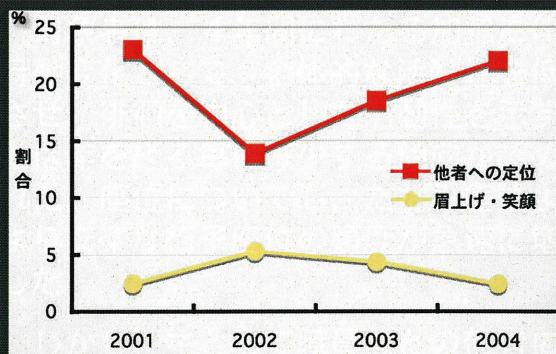
●他者の会釈・挨拶・発話に対する反応

6



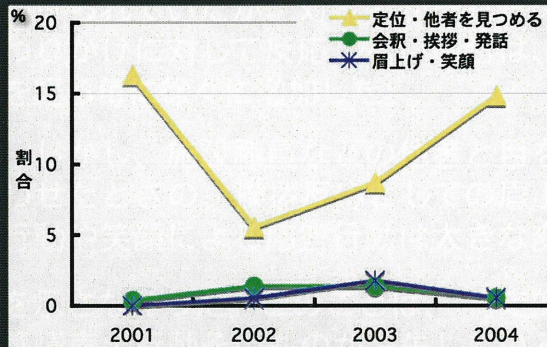
●他者への定位と挨拶行動の生起率

7



●自発的に他者に向けられた行動

8



まとめ

対象者は、4年間にわたる加齢に伴う行動変化として、全体的な活動性を低下させ、徘徊を中心とした活動性を示す行動は年を経る毎に減少する傾向が認められた。座位についても、たたみ座位よりより安楽な椅子座位の頻度が急速に増加した。

しかし、主として職員などの他者による接近や近接によって、他者との社会的相互交渉を可能にする社会的環境は大きな変化を示さなかった。

このような社会的環境の元で、社会的な相互交渉も主として他者から対象者に向けられていたが、対象者がそれらの関わりかけに対して反応しない割合は、年を経る毎に徐々に増加した。

しかし、施設職員などの他者と目を合わせたときの、挨拶反応としての眉上げ行動や笑顔による応答行動は大きな変化を示さなかった。このことは、肯定的な感情表出行動そのものが消失しているとは言えないことを示していた。

本対象者は、元来感情表出行動の観察頻度が少ない対象者であったため、4年間の追跡によって大きな変化を認めることができなかったものと考えられ、より感情表出の明確な対象者の分析が必要となるであろう。